

涌谷町埋蔵文化財調査報告書第4集

涌谷町指定文化財

追戸横穴墓群A地区

—整備事業に伴う調査報告書—

平成11年3月

涌谷町教育委員会

正誤表

写真2 遺査包含層セクション状況



写真2 遺物包含層セクション状況

涌谷町埋蔵文化財調査報告書第4集

涌谷町指定文化財

追戸横穴墓群A地区

— 整備事業に伴う調査報告書 —

平成11年3月

涌谷町教育委員会



A地区 3~9号墓状况



A地区 2号墓状况



A地区 2号墓羨道部状况



A地区 2号墓玄室赤彩状况



A地区 1号墓出土玉類

序 文

涌谷町には、原始・古代より、豊かな自然と長い伝統の中で培われてきた先人達の文化・生活の営みの証しである数多くの文化財が残されております。

私達は、このような先人達の貴重な文化遺産の示唆するところを汲み取り、大切に保存し、活用を図りながら将来へと受け継いでゆく責任を担っております。

近年、文化財につきましては保護・管理という面から文化財の有効活用へと展開が求められてきております。

さて、こうした観点から、皆様や将来涌谷町を担ってゆく方々へより深い理解と文化財の積極的な活用を図る事を目的とし、平成10年度より自治省の地域文化財保全事業として、町指定文化財である追戸横穴墓群につきまして公園整備事業を進めることとなりました。

追戸横穴墓群は、昭和37年から39年にかけて氏家和典氏と佐々木茂楨氏を中心として学術調査が実施され、古代涌谷における後期古墳文化の解明に多大の寄与をなすものであります。そうした結果と合わせて本書が、研究者のみならず多くの方々に広く活用され、文化財に対するご理解と保護の一助となれば幸いです。

最後に、遺跡調査にあたってご指導・ご協力いただきました宮城県教育府文化財保護課をはじめ、なにかとご理解とご協力を下さいました関係者の皆様方に、心より感謝とお礼を申し上げます。

平成11年3月31日

涌谷町教育委員会

教育長 木村 達夫

例　　言

1. 本書は、涌谷町指定文化財追戸横穴墓群整備事業に伴う発掘調査報告書である。
2. 本書の編集・執筆は、涌谷町教育委員会生涯学習課の協議のもと、福山宗志が担当し、執筆を行った。
3. 発掘調査及び報告書作成にあたり、下記の機関・方々に指導・助言を賜った。
(五十音順・以下敬称略)
青野圭一、阿部 篤、阿部博志、阿波広子、氏家和典、加藤道男、後藤秀一、佐々木茂樹、
佐藤敏幸、辻 秀人、真山 悟、村田晃一、石巻市教育委員会、三鷹市教育委員会、
東北歴史資料館、宮城県教育庁文化財保護課、涌谷町文化財保護委員会、
追戸横穴墓群整備委員会
4. 石器の材質は、東北大学教授 蟹沢 聰史 氏により鑑定されたサンプルをもとに、肉眼観察したものである。
5. 自然科学分析については、パリノ・サーベイ株に依頼した報告結果である。
6. 追戸横穴墓群A地区1号墓出土玉類は、再実測・記録にあたり、東北歴史資料館の承諾を受けた。
7. 本調査の諸記録・出土遺物等の調査資料は、涌谷町教育委員会が一括して保管している。

凡　　例

1. 図中・本文中使用の方位北（N）は、すべて真北である。
2. 調査の測量は、横穴墓の中軸線を基準として行った。
3. 本書で使用した地図は、建設省国土地理院発行の1:25,000（承認番号）平八、東復第41号のものを使用した。
4. 本報告書中の土色については、「新版標準土色帳」（小山・竹原：1973）を使用した。
5. 観察表内における法量で使用する（）は推定、△は残存範囲の計測を表す。
6. 遺構実測図および遺物実測図の用例は、以下のとおりである。

遺　　構

遺　　物

赤彩範囲



黒色処理



焼　土



礫石器磨面



凡　　例

本文目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯と調査要領	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査要領	1
3. 調査の方法と経過	2
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	3
1. 遺跡の立地と地理的環境	3
2. 歴史的環境	4
第Ⅲ章 調査の成果	8
1. 発見された遺構と遺物	8
【1号墓】	9
【2号墓】	15
【3号墓】	19
【4号墓】	21
【5号墓】	21
【6号墓】	23
【7号墓】	24
【8号墓】	25
【9号墓】	26
【遺物包含層と出土遺物】	27
第Ⅳ章 考察	29
1. 遺物について	29
2. 遺構について	31
3. 追戸横穴墓群と被葬者の位置付け	34
第Ⅴ章 科学分析	35
第VI章 まとめ	40

挿 図 目 次

第1図 涌谷町の位置	3
第2図 地形分類図	3
第3図 周辺の遺跡	5
第4図 追戸横穴墓群分布図	6
第5図 1号墓（その1）	10
第6図 1号墓（その2）	12
第7図 1号墓出土遺物（その1）	13
第8図 1号墓出土遺物（その2）	14
第9図 2号墓	16
第10図 2号墓出土遺物	19
第11図 3号墓	20
第12図 3号墓出土遺物	20
第13図 4号墓	21
第14図 5号墓と出土遺物	22
第15図 6号墓と出土遺物	23
第16図 7号墓	24
第17図 8号墓と出土遺物	25
第18図 9号墓と出土遺物	26
第19図 遺物包含層と出土遺物	27
第20図 遺物包含層	28
第21図 龍淵寺下横穴墓出土玉類	30
第22図 大崎地方における横穴墓群分布図	33

挿 表 目 次

第1表 遺跡地名表	5
第2表 A地区横穴墓計測表	42
第3表 A地区横穴墓群出土遺物観察表	42

写 真 目 次

口絵写真（カラー）：A地区3～9号墓状況、A地区2号墓状況、A地区2号墓羨道部状況

A地区2号墓玄室赤彩状況、A地区1号墓出土玉類

写真1 1号墓羨道部セクション状況	写真11 2号墓前庭部状況	写真21 9号墓玄室状況
写真2 遺物包含層セクション状況	写真12 2号墓羨道部壁状況	写真22 A地区出土遺物
写真3 1号墓状況	写真13 2号墓玄門状況	写真23 龍淵寺下横穴墓出土
写真4 1号墓前庭部状況	写真14 2号墓玄室壁状況	玉類
写真5 1号墓羨道部壁状況①	写真15 2号墓玄室壁状況	写真24 昭37年調査時状況①
写真6 1号墓羨道部壁状況②	写真16 3～9号墓状況	写真25 昭37年調査時状況②
写真7 1号墓玄門状況	写真17 3号墓状況	写真26 昭37年調査時状況③
写真8 1号墓玄室壁状況	写真18 4号墓状況	写真27 昭37年調査時状況④
写真9 1号墓玄室状況	写真19 7号墓玄門状況	写真28 昭37年調査時状況⑤
写真10 2号墓状況	写真20 8号墓玄門状況	写真29 科学分析

第Ⅰ章 調査に至る経緯と調査要領

1. 調査に至る経緯

追戸横穴墓群は、隣接する中野横穴墓群と共に昭和37年から昭和41年まで、氏家和典氏（当時宮城県第二女子高等学校教諭）と佐々木茂植氏（当時宮城県古川高等学校教諭）を中心にして発掘調査が実施され、ノミ状工具による柱列状痕跡や赤彩された横穴墓の検出、トンボ玉などの副葬品が出土しており、調査報告書が刊行されている。

その後、涌谷町文化財保護委員会において社会教育資料として広く有効活用を図るべく検討が重ねられ、平成6年7月14日に追戸横穴墓群が町指定文化財となったことと合わせ、その資料価値から墓群地の公有化と環境整備事業の計画案が提示された。

平成9年度までに基本設計と用地購入等の事業をすすめ、平成10年度より具体的な横穴墓群の保存・公開に関する整備を行うため、追戸横穴墓群整備委員会を設置し協議を行った。

その結果、今後の整備事業をより有効的なものとするため整備予定地内のA地区について横穴墓群の現在の状況や詳細な分布状況を把握すること、未調査部分の地域についての確認を行うことを目的として、県文化財保護課・東北歴史資料館等の指導を得ながら町教育委員会が再調査を実施することとなった。

2. 調査要領

- | | |
|-------------|--|
| (1) 遺跡名 | 追戸横穴墓群（遺跡番号37011） |
| (2) 所在地 | 宮城県涌谷町小塚字追戸沢二27-6地内 |
| (3) 調査期間 | 野外調査 平成10年9月7日～平成10年11月30日
室内整理 平成10年12月1日～平成11年3月31日 |
| (4) 調査面積 | 調査対象面積 16,686m ² 実質調査面積 約900m ² (A地区内) |
| (5) 調査指導・協力 | 宮城県文化財保護課 |
| (6) 調査主体・担当 | 涌谷町教育委員会生涯学習課
課長 桜井 信 課長補佐 宮下 周子
主事 佐藤 久美子 学芸員 福山 宗志 |
| (7) 調査協力 | (株)吉田産業、戸沢林業、(株)北宮城開発エンジニア
パリノ・サーヴェイ株式会社、(株)柏谷写真館 |
| (8) 発掘調査参加者 | <野外調査> 15名 佐藤みつ子、大友千代子、浅野勝子、松本咲子、佐藤幸代、
佐藤良子、平仲子、練生川寛子、松岡ちや子、畠岡初子、
加納敬子、菊池清子、富永フミヨ、平富美子、荒良子
<室内整理> 4名 佐藤幸代、畠岡初子、練生川寛子、松本咲子 |

3. 調査の方法と経過

調査区域は、前述のとおり、追戸横穴墓群A地区を対象とするもので、昭和37年に調査が実施されているため今回は、前回の発掘調査で未調査であった区域（1号墓の羨道部左半分と前庭部の1部、2号墓の前庭部の一部、墓道の有無など）とした。そして、その調査区域の精査、1・2号墓の再図面化と写真記録の作成、3～9号墓の表土と前回調査時の排土の撤去と横穴墓内に溜まっていた水抜き、追戸横穴墓群の分布図の作成、今後の整備に関しての情報収集などを目的として実施した。

追戸横穴墓群A地区は、丘陵の斜面に在し人がやっと入れる程の竹林となっていたため、調査前に調査区域一帯の立木伐採を行い、器材の搬入などのための進入路を設けた。また、こうした状況により調査時の土砂を搬出する場所がないため、横穴墓の前庭部から墓道などが確実にないと推測される部分までを調査区とし、伐採した竹を土留めに使用しながら斜面下部を土捨て場として調査を行った。

8月10日～30日まで立木の伐採が行われ、調査は9月7日から開始した。表土及び各横穴墓の入口部分に堆積していた前回調査時の排土を重機で掘りさげた後、遺構の平面プランの確認作業を行い、1～2号墓間と3～9号墓間にについて1/100の平面図を作成し、各横穴墓の精査を行った。

1号墓前庭部からその下部斜面にかけて灰白色火山灰をまばらに含み遺物が散布する不定形なプランが確認されたため、羨道部左側と共に1号墓の中軸線を基準として3m単位の方眼測量基準点を設け、これに沿った形で必要と思われる箇所にセクションベルトを残しながら精査を行った。

2号墓では、1号墓と違い灰白色火山灰を含むプランなどが確認されなかったため、前庭部のプランについて確認を行い、1号墓と同様に中軸線を基準として3m単位のグリットを組み、セクションベルトを設けながら精査を行った。

1・2号墓では精査終了後に玄室及び羨道部・前庭部の清掃を行った後、各横穴毎に1/20で平面図・断面図を作成し、写真撮影を実施した。3～9号墓については、各横穴付近の表土・前調査時の排土の除去を行った所、特に遺構や新たな横穴墓の検出などの確認がなされなかつたため、横穴墓を構成する岩盤と地山の検出を行い、各横穴墓の清掃・写真撮影を行った。その後、遺構・遺物について諸記録の再検討を行い、11月30日に総ての野外調査を終了した。調査終了日に、他の横穴墓群の状況などの確認のため付近の踏査を行った所、B地区横穴墓群の形成される丘陵の反対側（東側）斜面にも新たに横穴墓群が形成されていることが判明したが、今回はA地区が対象であったため、開口している横穴墓数の確認や大きな分布範囲の範囲のみ記録を行った。

調査区の全体図については1/100の平面図を作成し調査区の確認等を行った後、各遺構等の実測図（平面図・断面図）については1/20で作成した。実測図のレベル記入については平成6年度の追戸横穴墓群整備計画作成時に作成された測量基準点（KBM58.776m）より横穴墓玄室最奥中央に設けた中軸線の原点などにレベル移動を行い、それを基準として測定した。又、この各横穴玄室内に設けた原点を起点とし羨道入口中央に設けた点を通る線を中軸線とし、この羨道入口の点を横穴の標高として記録した。野外調査終了後、追戸横穴墓群全域の平面図（1/250）作成委託を行い、調査区範囲や遺構の範囲について正確な位置の把握している。写真記録については、35mm版カラーリバーサルとモノクロを適宜使用した。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の立地と地理的環境

追戸横穴墓群は、宮城県遠田郡涌谷町字追戸沢二地内に分布し、JR石巻線涌谷駅の北東約3kmに所在する。

涌谷町は、宮城県の大崎平野東部に位置し（第1図）、北は田尻町と米山町、西は田尻町と小牛田町、南は南郷町と河南町、東は桃生町と豊里町と接する。標高236mの筑岳丘陵が町中央部に位置して東西に連なり、丘陵北部では迫川によって形成された湿地と長根丘陵が、丘陵南部では江合川によって形成された自然堤防と湿地が広く分布する。又、町の西部では、追川と江合川が旧北上川と合流して南下し、石巻湾に注ぐ。

追戸横穴墓群は、前述の地形分類のうち筑岳丘陵の南側で樹枝状に細かくはりだした丘陵部の先端の1つに位置する（第2図）。丘陵地の基盤は、新第三紀、中新世の砂岩や凝灰質砂岩などによって形成され、追戸層と呼ばれる中新世の層から貝類化石等の出土が知られている。丘陵より南部は、江合川周辺の低地となっており、広い湿地帯と若干の自然堤防が分布している。自然堤防上は町の中心市街地として古くから利用され、湿地帯は排水条件が悪く、主に水田として利用されている。昭和25年に起きた江合川・迫川の氾濫をはじめとして、近年までこの湿地帯を氾濫原とした河川の氾濫が多く、河川の影響が極めて大きな影響を及ぼしていたと思われる。そのため、集落は丘陵の縁辺や微高地、自然堤防などに営まれることが多く、周辺の遺跡の立地も同様な条件の場所に所在することが多い。（1965：涌谷町）



第1図 涌谷町の位置



第2図 地形分類図

2. 歴史的環境（第3図）

涌谷町には、縄文時代より中世・近世に至るまで69ヶ所の遺跡が分布している。

<縄文時代>

国指定史跡長根貝塚を主として箕岳丘陵や長根丘陵の縁辺に遺跡が数多く分布する。それらのうちのほとんどが貝塚として知られており、特に長根丘陵には、長根貝塚、遮光器土偶の出土で有名な田尻町恵比須田貝塚、中沢日貝塚など、宮城県内内陆部の貝塚の中でも大規模な貝塚が集中して分布する。これらの貝塚は主として淡水性の貝類で形成されており、縄文時代の海進によりこの付近まで海岸線が迫っていたが、海岸線が後退した後も長く低湿地となっていたとされている。（松本：1984）

<弥生時代・古墳時代>

弥生時代の遺跡・遺構は、現在のところ町内では確認されていない。

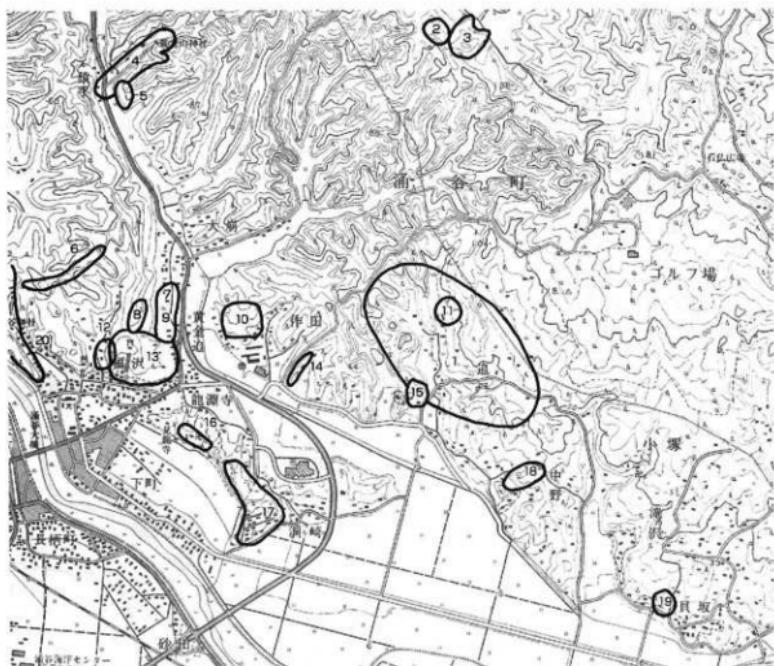
古墳時代になると、前期から中期前半にかけて大崎平野にも古川市青塚古墳、宮崎町夷森古墳、小牛田町京錢塚古墳など古墳が築造される。小牛田町山前遺跡は豪族の居館跡として知られている。中期後半～後期には、色麻町念南寺古墳とその周辺の円墳群などにみられるように埴輪の樹立や中小の円墳群などが築造される。終末期になると、新たに横穴式石室（色麻町色麻古墳群など）や横穴墓群が築造され始める。多数の横穴墓群が築造され始める時期は明確ではないが、松山町亀井囲横穴墓群や古川市朽木橋横穴墓群からの出土品などは7世紀前半に比定されている。涌谷町内においては、竜淵寺下横穴墓群や一箕横穴墓群、追戸・中野横穴墓群など、箕岳丘陵南辺に横穴墓群が築造される。追戸・中野横穴墓群では、出土品などから7世紀後半からの築造開始の位置付けがなされる（佐々木：1973）とともに、特に8世紀初頭に成立する長根窯跡で製造された須恵器が追戸横穴墓群B地区出土遺物と雷縫の関係にあったことが指摘されている。（辻：1984）

<奈良・平安時代>

奈良時代になると、多賀城の創建に伴い律令制が浸透し、大崎平野においても各地域に郡が設置される。涌谷町付近は「続日本紀」天平14年（742）正月条に見える「黒川以北十郡」のうち「小田郡」に属していたとされている。まだ、確定な郡名などの確認はなされていないが、小牛田町の一本柳遺跡などから「小田」銘の墨書き土器が出土している。長根窯跡や六郎窯跡などでは、町内において窯業生産が8世紀から行われていたことが知られている。又、国史跡黄金山産金遺跡を主とした箕岳丘陵一体では、天平21年（749）に東大寺大仏造営のための金を産出・献上がなされたことが知られており、このことにより、この地域が日本初の産金地として、年号が改められたり調・庸といった租税の免除がなされるなど、古代東北地方の開拓史の一端や律令制における国家経営の一端を伺わせる。

<中世>

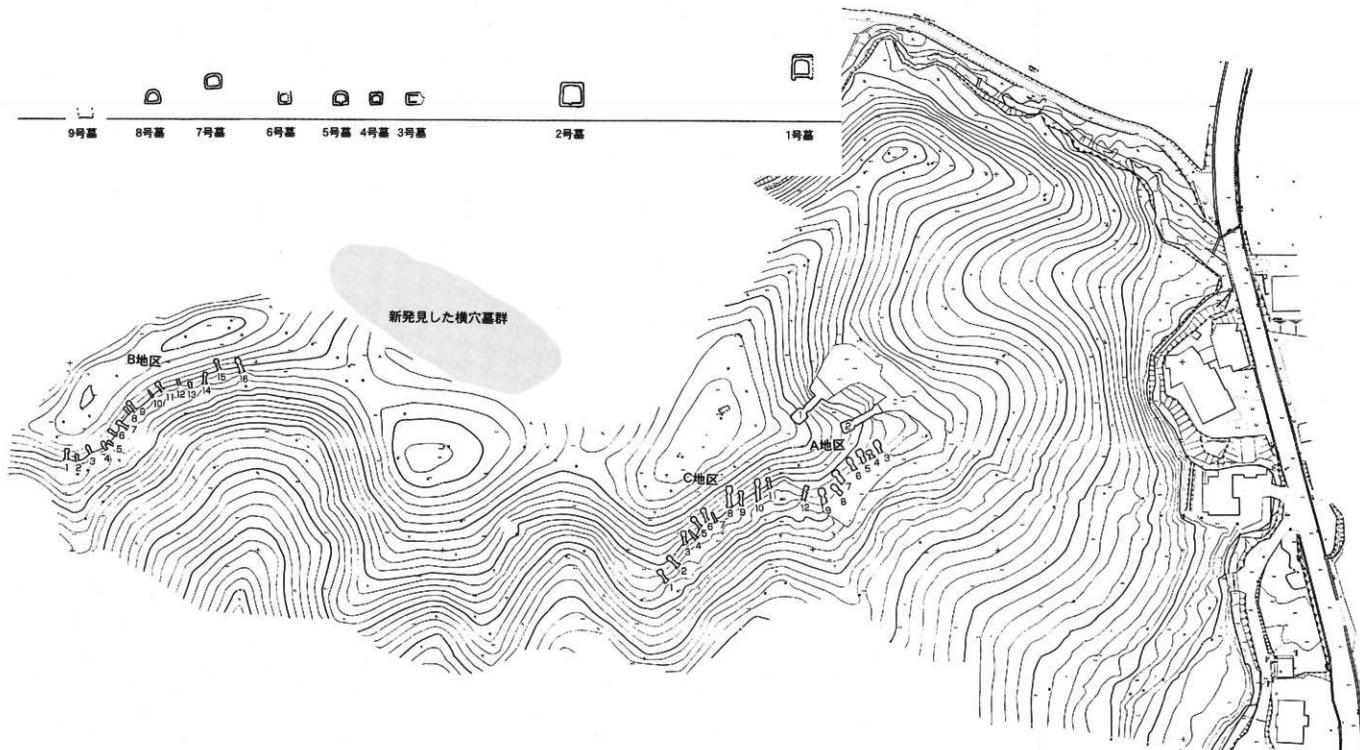
中世になると、涌谷城跡、七九郎館跡、六郎館跡などにみられるように、丘陵部上に城館が多く築造される。大同2年（807）に創建されたと伝えられる天台宗「箕峯寺」では、当地を支配していた葛西・大崎氏など多くの武士や土豪の帰依・信仰をあつめたとされている。又、町内には、大谷地の御前姫神社板碑群を始めとして弘安元年碑や宝徳元年碑など板碑が各所に分布しており、当地方における中世社会を知るうえでの貴重な資料となっている。



第3図 周辺の遺跡

番号	遺跡名	時代	種別	番号	遺跡名	時代	種別
1	追戸・中野横穴墓群	古墳、魏	横穴古墳	11	追戸沢A遺跡	敵、武	包含地
2	七九郎下みよし掘跡	古代	轟、製糖	12	日向町遺跡	古代	散布地
3	七九郎館跡	唯、雅	城館	13	日向館跡	移、活	包地、轟
4	黄金山産金遺跡	奈良	産金遺跡	14	一皇子遺跡	江戸	墓地
5	黄金山南遺跡	平安	集落跡	15	追戸沢B遺跡	古代	包含地
6	城山裏土塁遺跡	中世？	土塁跡	16	龍淵寺下横穴古墳群	古墳、武	横穴古墳
7	神明社東遺跡	古代	包含地	17	洞ヶ崎遺跡	古墳、古代	包含地
8	福沢遺跡	古代	包含地	18	中野遺跡	古墳、古代	包含地
9	黄金追遺跡	奈良	包含地	19	貝坂貝塚	萬葉～中	貝塚
10	八方谷遺跡	古代	包含地	20	涌谷城跡	敵、移、道	轟、散地

第1表 遺跡地名表



第4図 追戸横穴墓群分布図

第Ⅲ章 調査の成果

1. 発見された遺構と遺物

追戸横穴墓群は、A～F地区と呼ばれる10基程度の横穴墓群のまとまりによって構成される。このうちA～C地区については、同一の丘陵内に分布しており、丘陵の南先端の南・西斜面にL字状にA地区、A地区より奥の西斜面にC地区、さらにその奥のやや離れた西斜面にB地区が築造される。これらは、丘陵の尾根となる部分より若干下った標高約60m付近にはば一列に分布する。（第4図）

昭和37年7月の発掘調査により、A地区9基、B地区16基、C地区12基の横穴墓が確認されており、A地区は南から北にかけて、B・C地区は北から南にかけて各地区毎に順に番号が付けられており、詳細な調査が行われている。従来から開口していたものも多いと思われるが、調査以前の各横穴墓の状況は定かでない。

今回の調査において、A地区内では他の新たな横穴墓は検出されていない。調査区内で検出された主な遺構としてはA地区1～9号横穴墓があり、1号墓の下の斜面に広がる浅い谷状の斜面の堆積層に分布する遺物散布層のみである。

調査区内は、表土及び前回調査時の排土と旧表土を剥ぐと横穴を構成する岩盤面と岩盤露出部分より周囲・下部から堆積する地山面が検出される。この地山面と表土の間に遺物が散布する層がみられ、横穴墓は表土の下がすぐに岩盤となるような部分に分布する。

又、調査終了時に、付近の横穴墓の状況を踏査した所、B地区的分布する斜面より丘陵の尾根をはさんだ反対側の東斜面に新たに横穴墓群が分布することを確認した。すでに開口しているものは約9基あり、閉塞部が崩壊しほぼ土中に埋まりかけた状態である。分布状況は他の地区と同様で丘陵の尾根となる部分より若干下った所に一列に分布するようである。この新たに発見した横穴墓群は、今回の調査区域外であり、発見が調査終了となっていたため今回は開口して確認のされた横穴墓群の個数確認とおよその分布範囲の確認のみ行った。

以下に各横穴墓と検出した遺構について述べることとするが、調査内容が、前調査時の詳細な調査報告書の内容と重複する部分もあり、今回そうした部分についてももう一度整理し、前回調査内容と今回調査内容を合わせて記述する。そのため、前調査時の出土遺物や図面などを探したが、1号墓出土の玉類の一部を除いて町内等に記録や出土品の保管場所不明であったため、遺物や遺構の図面など一部は昭和48年3月発行の「追戸・中野横穴群」の記載資料を再トレース・転載し使用した。

【1号墓】（第5～6図）

A地区のうち標高63.3mの南斜面の一一番東側に構築されている。玄室・玄門・羨道部・前庭部からなっており、隣に構築される2号墓と2基で一つのまとまりが考えられる。中軸線方向はN-34°-Wだが、玄室～羨道部の中軸線に対し、前庭部の中軸線が西に8°ほど偏する。追戸横穴墓群中でこれまでの所最大の横穴墓であるが、崩落が著しく原形を留めず、羨門などは崩壊し閉塞用と思われる柱穴が床面に残るのみである。雨水などの地下水の浸透が激しく、特に玄室天井部分においては、調査中においても始終湧水している状態であった。

〔玄室〕

奥行き3.84m、幅3.64mのやや歪んだ方形を呈し、天井までの高さ2.24mを計る。立面形は切妻式の家型をなし、周囲に縁帶（高さ3～4cm）をもつ3棺座を「コ」の字状に備え、玄室壁際には溝が巡る。床面は奥壁から開口部にかけて約15cmほど傾斜している。また、奥棺座は後世に破壊されたとみられ、床面が玄室奥壁まで延長され、床面中央には奥壁から玄門付近まで排水用とみられる溝（幅10cm、深さ5cm）がある。棺座は、左右棺座が床面より約15～20cm、奥棺座が床面より25cmの高さでほぼ水平に造られており、奥棺座が左右棺座より一段高い。この奥棺座と左右棺座の間、左右棺座の玄室入口側壁にも縁帶がつくが、すでに破損しており詳細は不明である。但し、左右棺座の玄門側部分の縁帶は、残存する部位で幅約20cmと他の縁帶に比べ幅広くなっている。左棺座の縁帶隅では、排水用とみられる切込みが設けられている。壁面・天井は、殆どが剥落やカビ・コケにより観察不可能であったが、壁面と天井の一部に幅10cmの工具により柱列状の整形がなされている。又、天井左隅の一部に幅2mm程の細い線で動物のようなものが描かれるが後世のイタズラとも推測される。

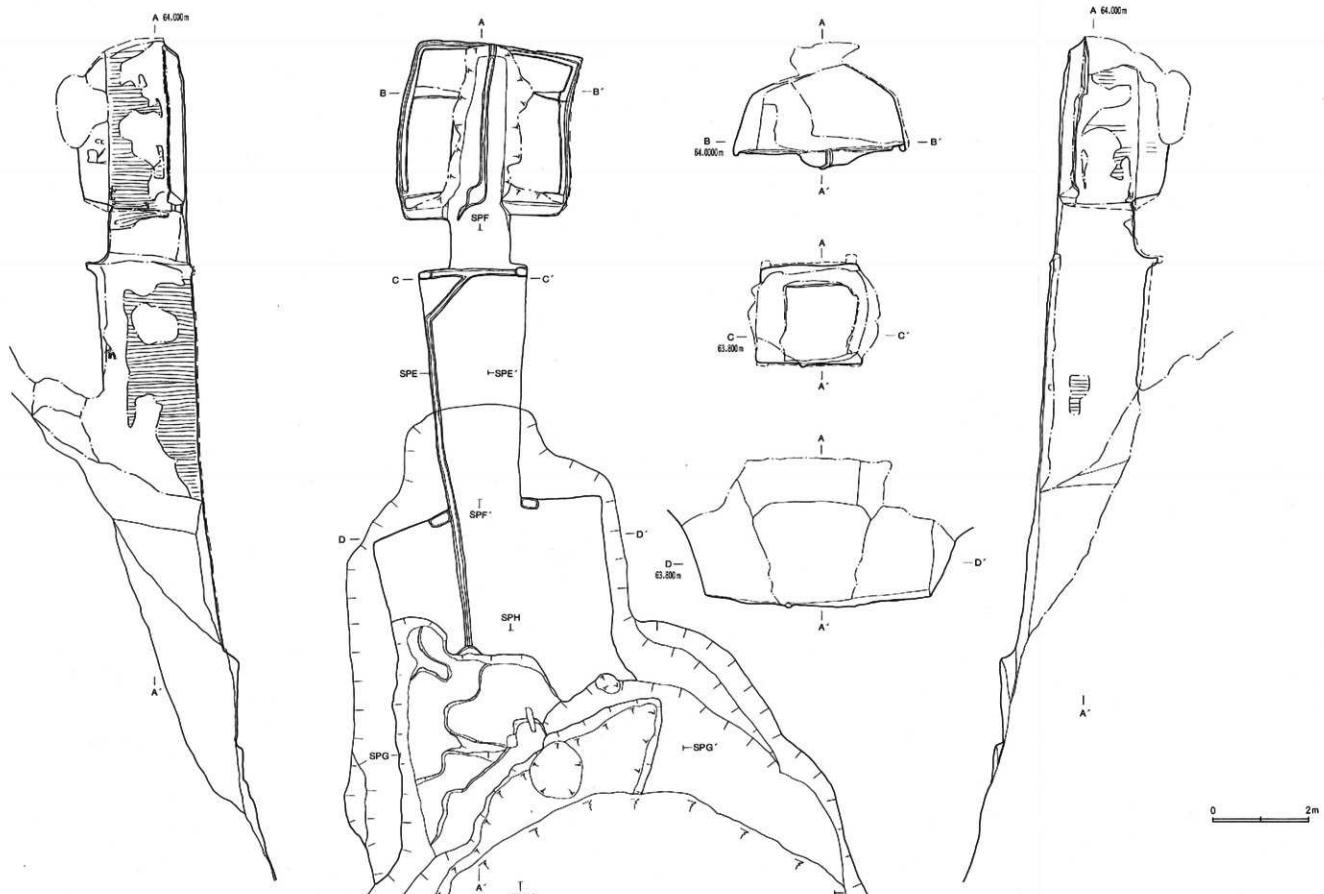
〔玄門〕

玄室のほぼ中央に位置し、奥行1.10m、幅1.30m、高さ1.70mを測る。右側の壁面が左壁面より10cm奥につくられ平面はやや歪んだ方形となり、立面形は方形を呈する。壁面は殆ど崩落しているが、残存する部分では玄室と同様な柱列状の整形がなされる。また、羨道部側の天井部分には高さ5cm幅10cmほどの仕切状の突出がみられる。

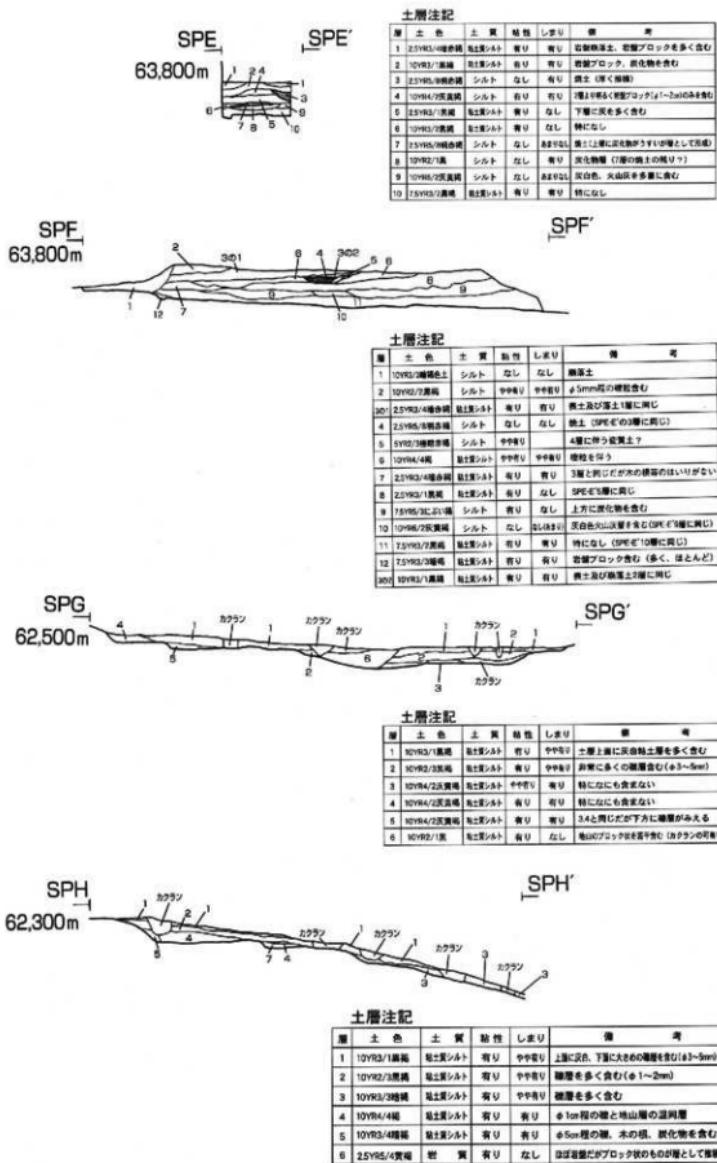
〔羨道〕

奥行き6.00m、高さ2.25m、幅2.24m（玄門側）1.54m（開口側）を測り、開口側が幅狭い形となる。立面形は方形を呈していたと思われるが、殆ど崩落しており原形を止めている。床面は、玄門より6cmほど低く、中軸線上の開口側と玄門側で19cmの高低差があり緩やかに傾斜する。また、玄門入口の床面と天井部の四隅に閉塞用と思われる方形の柱穴と溝（幅18cm、深さ6cm）がある。左右の天井部と床面部の柱穴はそれぞれ対となるものと思われる。また、床面の溝の中央から排水用とみられる溝が1条分岐して、羨道左壁際に至り、そのまま壁に沿ってほぼ直線に前庭部まで続く。羨道壁面では、玄室と同様な柱列状の整形がされ、左壁中央の天井近くには「大」字状に幅6cm、深さ4cmほどで断面「凹」状の彫込がみられる。天井部は、崩落及びコケの育成などにより詳細は不明である。

羨道部は、左側半分が未調査であったため1号墓の中軸線を土層観察用のセクションベルト（第6図）として精査を行った所、羨道中央床面より10cmの高さの9層よりまばらに灰白色火山灰をプロ



第5図 1号墓（その1）



第6図 1号墓（その2）

ック状に多く含む層が検出され、漢道中央部のその直上の層（3層・7層）より焼土が2ヶ所厚く堆積している状況が確認された。土層堆積の状況から、閉塞施設崩壊後の二次堆積の可能性もあるが、灰白色火山灰が比較的まばらに分布することから比較的古い時期に開口し自然堆積した可能性が高い。

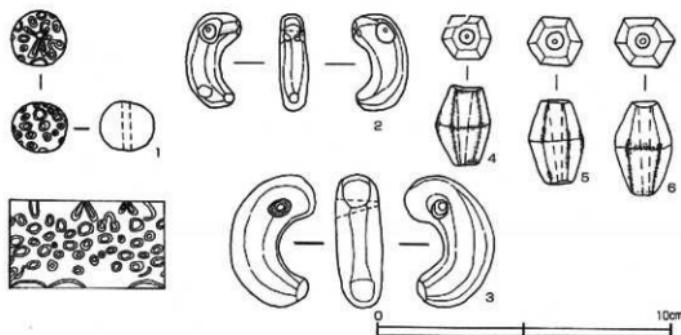
【前庭部】

前庭部は、奥行き5.90m、漢道入口側で幅4.86mで28.7m²の平面形が台形となる大きな平場となる。床面は、漢道部床面の緩やかな傾斜がそのまま続き、中軸線上で手前から奥にかけて約79cmの高低差がある。漢道部入口そばの床面には方形の柱穴が2ヶ所見られる。（長軸38cm、短軸22~24cm、深さ9~11cm）漢門部の閉塞施設と思われるが、天井部など崩落のため詳細は不明である。床面上には工具痕と思われるものが一部残存していたが、残存状況があり良くなく、工具など詳細は不明である。

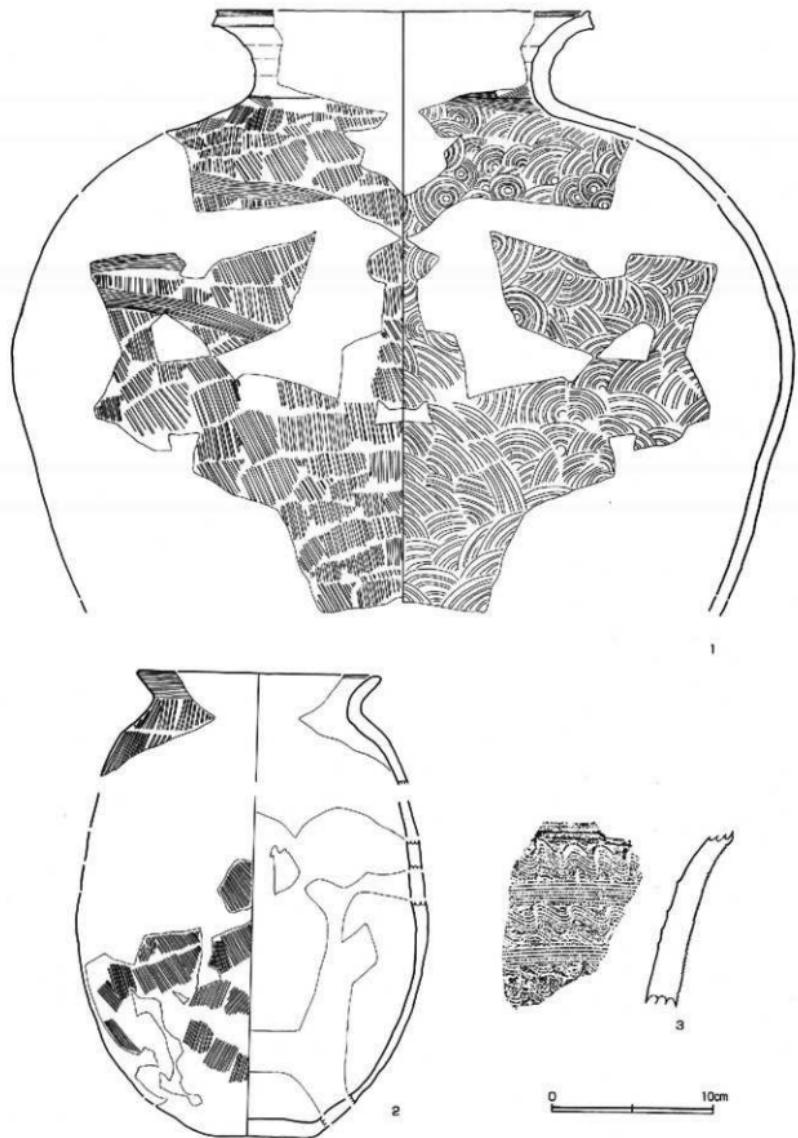
前庭部の左側入口部分で、前調査時の報告書に記述されている「不定形な粘土床類似の土層」とされる部分（4・5層）を検出したが、灰白色火山灰がブロック状に混じり遺物が散見することからセクションベルトを設けて精査を行った所、不定形な段をもつ平場となることが確認された。どのような機能などを目的とするものか不明だが、漢道部左壁際を沿ってきた溝が、この段の手前で半円状の平場に統き、この不定形な段に到達する。

【出土遺物】（第7~8図）

前調査時に、漢道部堆積土中より須恵器破片、前庭部左側より須恵器大甕体部片とトンボ玉、メノウ製勾玉、ヒスイ製勾玉、切子玉、コハク玉などの玉類（第7図）が出土し報告されている。今回の調査においても同様な場所からの遺物（第8図）の出土が見られた。但し、玉類の新たな検出は見られなかった。第8図1・2は前庭部の1層上面より出土した遺物である。1は須恵器大甕破片であり前調査時の報告にある甕破片と同様の位置からの出土であり、同一個体と推定される。外面は木目斜交平行タタキ、内面は円形タタキによるものである。2は、前庭部右端より出土した土師器甕で口縁部と体部片が接合しないが胎土などから同一個体と思われ、口頸部外面はナデ、体部は縱位ハケメで内面は摩滅が著しく不明である。3は須恵器大甕破片であり漢道部11層中より出土したものである。



第7図 1号墓出土遺物（その1）



第8図 1号墓出土遺物（その2）

【2号墓】（第9図）

1号墓の左側に位置し、標高61.2mの南斜面に構築されている。玄室・玄門・羨道部・前庭部からなっており、1号墓とほぼ同様の形態・規模をもつことから、2基で1つのまとまりが考えられる。中軸方向はN-19°-Wで、1号墓と同様に玄室～羨道部の中軸線に対し、前庭部の中軸線が西に9°偏している。A地区横穴墓群中もっと良好な保存状況を保っている。1号墓に比して、水の浸透は一切みられず、その為か墓内に排水などを意識したと推測される施設はみられない。

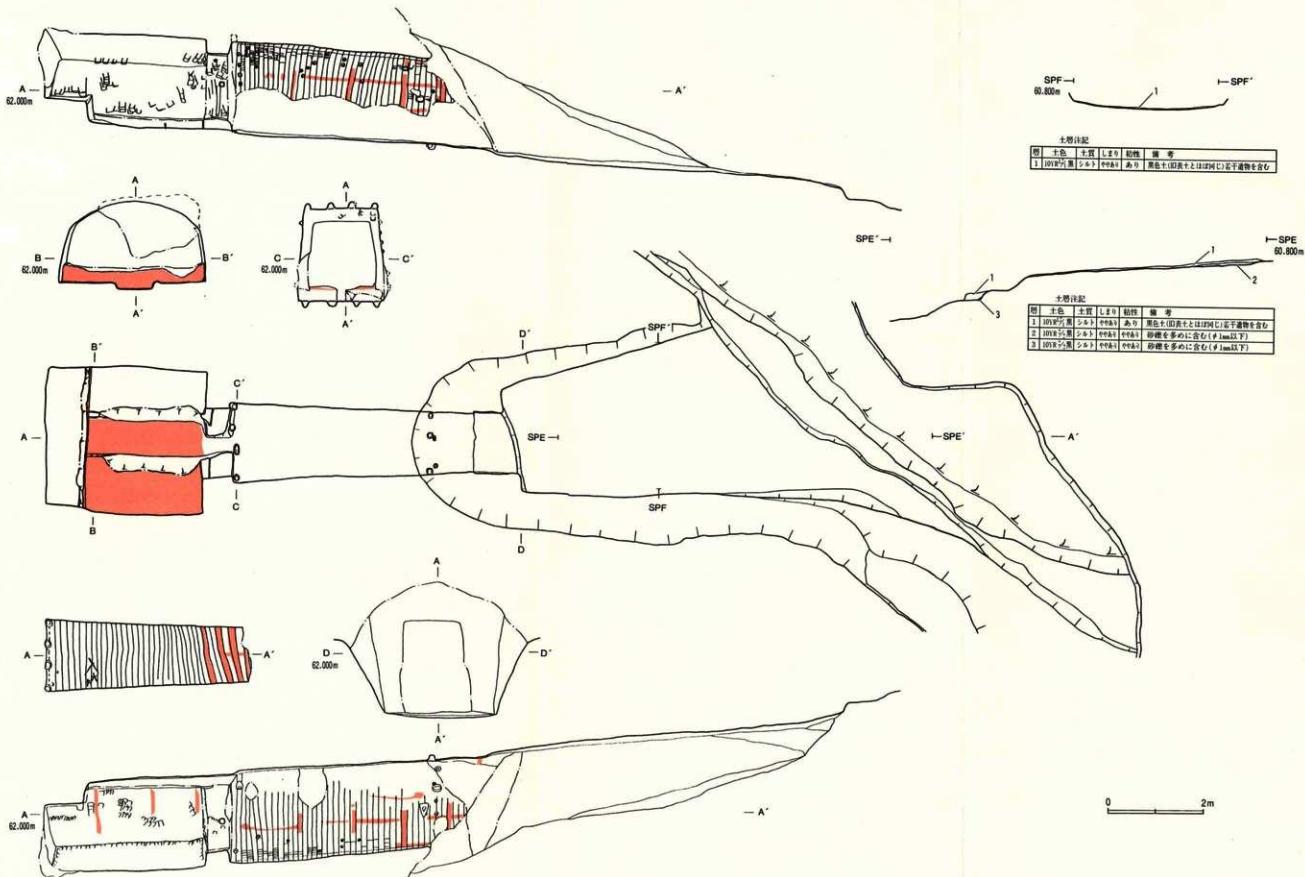
【玄室】

奥行き3.26m、幅3.06mの方形を呈し、天井までの高さ1.92mを測る。立面形は切妻式の家型をなし、「コ」の字状の3棺座を有する。縁帶は、1号墓のように各棺座の周囲を巡るのではなく、各棺座の通路床面に対してのみみられるが、縁帶付近の破損が著しいためどういったものだったのか確認できなかった。破損の状況などからすると棺座より高さ15cm、幅60cm程度と推測される。床面は奥棺座手前から開口部にかけて約14cmほど緩やかに傾斜している。棺座は、左右棺座が床面より21～23cm、奥棺座が床面より39cmの高さでほぼ水平に造られており、奥棺座が左右棺座よりも一段高くなっている。又、左右棺座は玄門の台座部分まで伸びて玄室の玄門側壁と一致しない。天井と壁面は、1号墓同様に剥落やカビにより観察不可能に近かったが、壁面と天井の一部に幅12cmの工具による整形痕跡が確認された。だいたいが上一下へ向かっての痕跡だが、天井や壁面の隅に当たる部分や天井の軒回りの線などの部分では横方向に残存するものもあった。又、整形を行った際に特に深く痕跡を残したものしか確認できなかったため詳細は不明であるが、1号墓と同様に天井の一部に前述の工具と同じ工具で、柱列状の整形も確認された。

又、玄室の記録を行うため室内の清掃を行った所、左壁・左棺座の台床部分・各棺座の側面部・通路床面が赤彩されていることが見つかった。左壁は幅12cmの赤彩が縦位に約90cmの間隔をおいて3条はしるもので、天井部・奥壁・右壁では残存状況が良くないせいか確認できなかった。左棺座の台床部分・各棺座の側面部・通路床面で確認された赤彩は、特定の文様など構成するものではなく、一面を赤彩するものと思われる。これらの部分は残存状況が悪く堆積土の除去の際、一緒に表面が剥離していくような状況であったため、一面に広がる様子を確認したのみで全面検出しなかった。奥棺座・右棺座についてはさらに残存状況が悪く確認できなかった。又、通路床面の赤彩は玄門部分手前で薄くなり玄門床部分では確認されない。

【玄門】

玄室のほぼ中央に位置し、奥行き0.60m、幅1.40m、高さ1.95mを測り、立面形は方形を呈する。床面には、玄室の左右棺座の端と同じ幅までの奥行き70cm、幅60cm、床面からの高さ30cmの台座が見られる。台座の平面形は方形をなしてほぼ水平につくられており、左右棺座の高さと台座の高さが一致するようつくられている。又、左右棺座と台座の間には幅25cm、高さ10cmの縁帶があり区別されている。この縁帶の玄門側面で、残存状況が良くないため詳細は不明であるが玄室内と同様に赤彩の痕跡がみられた。通路床面は玄室内と段差なくそのままの緩やかな傾斜であるが、羨道部との境で10cm程の高低差をもつ段が1段見られる。壁面では、玄室と同様に上一下に向かう工具痕跡が見られ



第9図 2号墓

特に右壁下部では柱列状の整形痕が数条確認された。天井部については、剥落やカビのため詳細は不明である。

[羨道]

奥行き6.00m、高さ1.25m、幅1.68m（玄門側）1.28m（開口側）を測り、1号墓と同じく、開口側が幅狭い形で立面形は方形となる。床面は、中軸線上の開口側と玄門側で約30cmの高低差があり緩やかに傾斜した後、羨道入口部分で前庭部と12cmの高低差をもつ比較的緩やかな段が1段形成される。

玄門入口の床面には径18cm、深さ14cmの4つの円形の柱穴が羨道の幅に対して均等に見られ、これと対となる穴が天井部にも見られる（径14cm、深さ14cm）。又、同じ部分で左右壁面に対となる円形の穴（径10cm、深さ8cm）が6ヶ所、羨道入口より2m奥の床面で隅丸方形ぎみの柱穴（径16cm、深さ10cm）が3ヶ所（天井部は崩壊しているため対となる柱穴があったことは確認できたが、詳細は不明である。）確認された。その他壁面の中央などにいくつか小柱穴（径6cm、深さ4cm程度）が見られたが、対とならず他の柱穴に比して粗雑な構造のものが多いため対となるものや規模の大きなもののみ一応記録した。これらを総合すると玄門入口と羨道入口付近でこの穴を用いて閉塞していたものと思われる。又、羨道入口から前庭部にかけて河原石が数個検出され、これらも用いていたと思われるが閉塞していた位置に集中せず散在して検出されたので原位置を推定できなかった。この羨道入口から入口付近の柱穴までが羨門として利用されたものと思われる。

壁面・天井部は玄室と同様の工具・形態により柱列状の整形痕がみられ、玄室壁面と同様な幅10cmの赤彩線が両壁と天井に縦横に走り格子状を呈する。壁面の縦横線は、縦線が開口部付近から約90cmおきに柱列状整形に沿って4条見られ、横線は右壁で床面から68cmと122cmの部分にはほぼ水平にと、天井との接部分に3条見られる。左壁も残存状況から同様の位置に描かれ左右対象となっていたようである。天井部は開口側において柱列状整形に沿って1条おきに4条横線が走り中軸線に沿って1条縦線が走る。両壁面の手前から2番目の縦線と天井部の3番目の横線はつながっている。天井部と壁面の床面からの高さ100cmまでは剥落などが著しく確認できなかった。前回調査時に玄門近くの羨道天井部に「大」字状の痕跡が3ヶ所知られており、今回も見られたが幅3mm程度の細い線で描かれ1号墓でみられたものとは大きく異なる。

羨道内には、前回調査によって堆積土が總て排出されており、一切残存していなかった。

[前庭部]

前庭部は、奥行き8.20m、羨道入口側で幅2.36mで19.4m²の1号墓と同様に平面形が台形の大きな平場となる。床面は、中軸線上で約12cmの高低差があり玄室や羨道と同様に前庭部入口に向かって緩やかに傾斜し、前庭部の左右が中央より7cm高く浅い「U」字状となる。前庭部入口（羨道入口より7m手前）で岩盤を切り込んでつくられた階段状のテラス（幅約50cm）が検出された。これより手前は岩盤が地中に潜り地山面となり特に墓道などの構造は確認されなかった。ただ、このテラス部分は若干左側まで伸びるため墓道などと関連が推測されるが、残存状況などによりはっきりしない。

前庭部の堆積土は、1号墓でみられたような灰白色火山灰などの検出がされず、旧表土下では床面に到達するため、層の対比などはできなかった。

【2号墓出土遺物】（第10図）

前調査時に内部より須恵器破片若干、砥石片、骨片、羨道部より切込壺が出土している。今回調査では、前庭部中央の床面より須恵器破片（1）が、表土内より摺鉢の底部破片（2）が出土している。1は外面に櫛齒状工具で波状文が施され、2はロクロ成形によるもので近世以降のものである。

【3号墓】（第11図）

A地区のうち標高61.168mの西側斜面の一番南側に構築され、玄室・玄門・羨道・前庭部からなり中軸線方向はN-65°-Wである。1、2号墓とは尾根を挟んで12m西に離れた位置に在する。

〔玄室〕

奥行き1.85m、幅1.80mで平面形が左隅が張る不整な方形を呈し、天井までの高さ0.90mで立面形が変形アーチ形となる。奥壁はほぼ床面に対し直立し、棺座などの施設はみられない。床面はほぼ平坦である。

〔玄門〕

玄室のほぼ中央に位置し、奥行き0.45m、幅0.95m、高さ0.90mを測る。立面形は方形をなし、玄室の天井と床との境が見られなく、高さが玄室と一致する。玄室と羨道部の境の床面で羨道部床面との約8cmの高低差をもつ段があり、そのまま羨道部側にある床～天井を廻る溝（幅10cm、深さ4cm）となる。前回調査でこの溝と共にここで閉塞していたと思われる河原石の検出が報告されているが、今回の調査では4～5個それと思われる河原石が玄門付近で見られただけで、それらの石も原位置を留めていない。

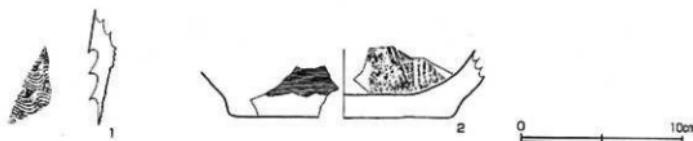
〔羨道〕

羨道部は、奥行き1.85m、幅1.00mで立面形は方形を呈していたと思われるが天井部分が玄門付近まで崩落しているため確認できなかった。床面は平坦だが開口部に向かってゆるやかに傾斜する。幅は玄門側に比べ開口側が若干幅狭くなる。

〔前庭部〕

前庭部は、奥行き1.16m、幅1.30mで、羨道部の天井が崩落しているため、詳細は不明だが台形状の平面形をなす。床面は羨道部との明確な区別をもたず緩やかに傾斜する。羨道部入口の左右脇には、閉塞用と思われる方形の柱穴（長軸22cm、短軸18cm）が見られる。

羨道入口より1.85m手前の床面で5cmほどの高低差をもつ段が1段あり、その手前は緩やかな岩盤の斜面となっている。



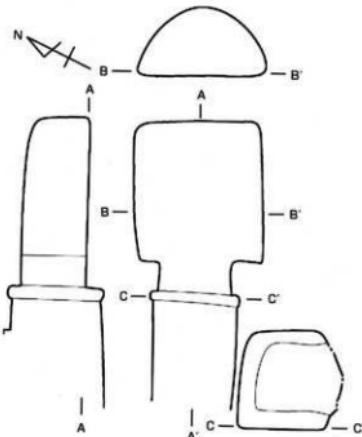
第10図 2号墓出土遺物

この段差は前庭部の両壁のなくなる部分と一致することからここまでが前庭部と思われる。

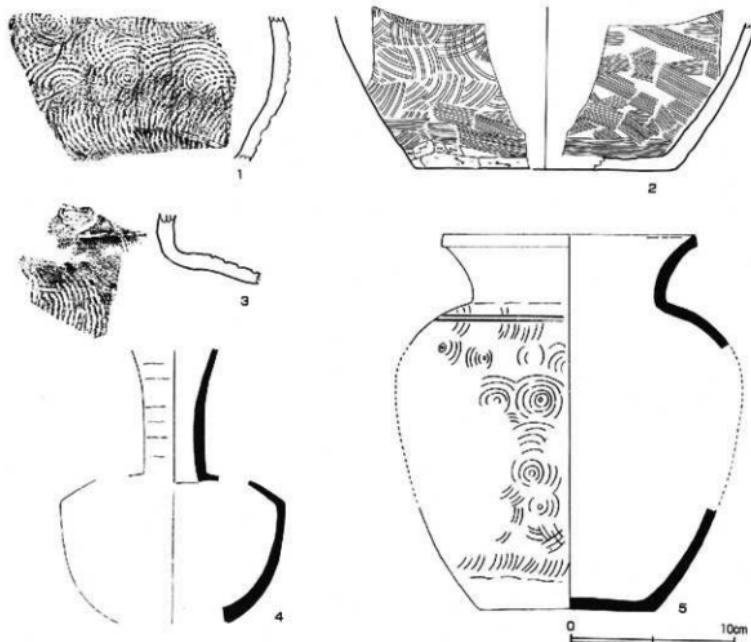
【出土遺物】(第12図)

前調査時に羨道床面の積石の下などから須恵器長頸壺片(4)や壺破片(5)が出土している。今回は羨道部の閉塞溝内から5と同一遺物と思われる須恵器片(1、2)が、前調査の排土から須恵器壺の頸部破片(3)が出土している。1、2は外面がケズリ若しくは円形タタキ後に底部付近の一部にナデ、内面がナデを施すものである。底部はナデにより切離し後再調整されている。

3は、体部に円形タタキ後頸部にナデが施されるものである。1~3はいずれも接合しないが、同一個体であり灰白色に近い色を呈し、胎土に石英粒、黒色の砂粒を含む。



第11図 3号墓



第12図 3号墓出土遺物

【4号墓】（第13図）

標高60.7mの西側斜面で3号墓の北側の17.5m離れた位置に構築され、玄室・玄門・羨道・前庭部からなり中軸線方向はN-66°-Wである。1号墓と同様に水の浸透が著しく常に湧水している状態であった。

[玄室]

奥行き1.25m、幅1.55mで平面形が不整な隅丸の長方形を呈し、天井までの高さ0.85mで立面形が変形ドーム形となる。棺座などの施設はみられず、床面はほぼ平坦で玄室奥から手前に緩やかに傾斜する。玄室中央部付近から羨道部にかけて幅18cm、深さ6cmの排水用とみられる溝がある。

[玄門]

玄室の中央より右側に位置し、奥行き0.35m、幅0.65m、高さ0.90mを測る。立面形は方形をなし、玄室の天井と床との境が見られなく、高さが玄室と一致する。玄室と羨道部の境の床面で羨道部床面との約8cmの高低差をもつ段があり、そのまま羨道部側床にある溝（幅10cm、深さ4cm）となる。

[羨道]

羨道部は、奥行き1.27m、幅0.93mで立面形は天井部隅が隅丸ぎみとなる方形を呈していたと思われるが天井部分が玄門付近まで崩落しているため確認できなかった。床面は平坦だが開口部に向かってゆるやかに傾斜する。壁面で床面より47cmの高さの所に貫抜穴（円形）が1ヶ所見られる。対となる部分は崩落して不明である。閉塞用と思われる河原石が散在していたが、原位置を留めていない。

[前庭部]

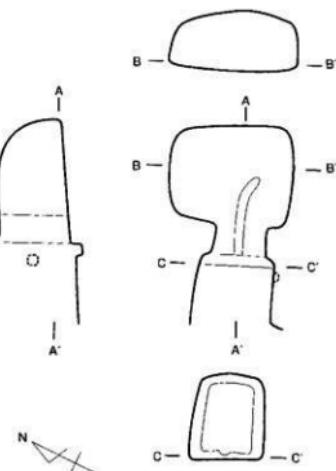
前庭部は、奥行き1.40m、幅1.52mで、羨道部の大井が崩落しているため、詳細は不明だが台形状の平面形をなす。床面は羨道部との明確な区別をもたずに緩やかに傾斜する。羨道入口より1.40m手前部分で岩盤の斜面となっており、前庭部の両端のなくなる部分と一致するため、ここまでが前庭部と思われる。前庭部内に堆積土があったが今回の調査ではこの部分は精査していない。

[出土遺物]

前回調査時に遺物は出土していない、今回は内外両面黒色処理された土師器壊片などが表土より出土しているが小破片のため不明である。

【5号墓】（第14図）

標高61.2mの西側斜面で4号墓の北側の1.30m離れた位置に構築され、玄室・玄門・羨道・前庭部からなり中軸線方向はN-64°-Wである。



第13図 4号墓

[玄室]

奥行き1.95m、幅2.00mで平面形が周囲の壁面がやや膨らんだ方形を呈し、天井までの高さ1.15mで立面形が変形ドーム形となる。棺座などの施設はみられず、床面はほぼ平坦で玄室奥から手前に緩やかに傾斜する。玄室中央部から狭道部にかけて幅13cm、深さ5cmの排水用とみられる溝が中軸線にはば沿って見られる。天井部は、入口側でもかるく彎曲して玄門にいたる。

[玄門]

玄室のはば中央に位置し、奥行き0.40m、幅0.90m、高さ0.95mを測る。立面形は天井幅狭の台形状の方形をなし、玄室の床との堀が見られなく緩やかに傾斜して続く。玄室と狭道部の床面で狭道部床面との約8cmの高低差をもつ段があり、そのまま狭道部側床にある溝（幅13cm、深さ6cm）となる。

[狭道]

狭道部は、奥行き1.90m、幅1.24m、高さ1.20mで立面形は方形を呈する。床面は平坦だが開口部に向かってゆるやかに傾斜する。壁面には1、2号墓で確認された柱列状の整形痕跡（幅6cm）と、左右壁に断面「V」字状の「十」字形の線刻がみられた。狭道閉塞用と思われる河原石が散在してみられたが、原位置を留めていない。

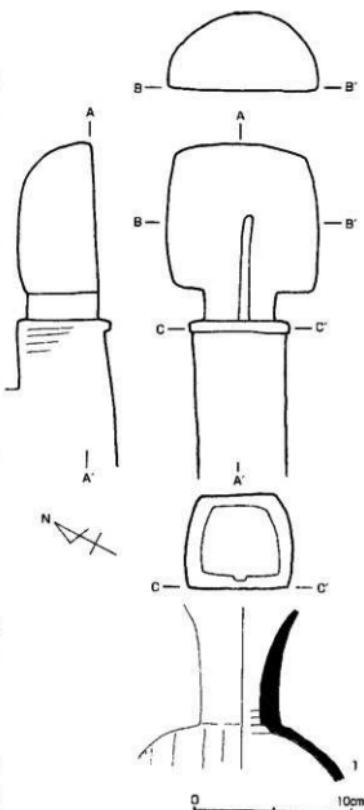
[前庭部]

前庭部は、奥行き1.89m、幅1.89mで、台形状の平面形をなす。床面は狭道部入口との堀で前庭部床面との高低差9cmの段差があり、全体的に緩やかに傾斜する。狭道入口より1.89m手前の部分で岩盤の斜面となっており、前庭部の両壁のなくなる部分と一致するため、ここまでが前庭部と思われる。

[出土遺物] (第14図)

前調査時に狭道部より長頸壺底部破片1点、長頸瓶の口縁部破片(1)1点などが出土し報告されている。

今回の調査では、外面に格子状タタキ後指ナデ、内面に円形タタキを施す須恵器片が出上しているが、小破片のため器形など不明である。



第14図 5号墓と出土遺物

【6号墓】（第15図）

標高61.0mの西側斜面で5号墓の北側の2.80m離れた位置に構築され、玄室・玄門・羨道・前庭部からなり中軸線方向はN-61°-Wである。

【玄室】

奥行き1.90m、幅1.45mで平面形が右壁面が膨らみ奥行きが幅に対して長い長方形を呈し、天井迄の高さ0.85mで立面形が変形アーチ形となる。棺座などの施設はみられず、床面は玄室幅の部分で緩やかな「U」字状となり、玄室奥から手前に緩やかに傾斜する。天井部は、奥壁と天井の堺で軽い陵をなし、玄門側では天井の高さにほとんど区別がない。

【玄門】

玄室のほぼ中央に位置し、奥行き0.40m、幅0.90m、高さ0.95mを測る。立面形は方形をなし玄室の床との堺が見られないが、若干玄室内の傾斜よりもきつめに傾斜する。玄室と羨道部の堺の床面で羨道部床面との約5cmの高低差をもつ段があり、そのまま羨道部側床にある溝（幅6cm深さ4cm）となる。

【羨道】

奥行き1.65m、幅1.24mだが、玄門部分まで天井と壁面が崩落しており、立面形は不明である。

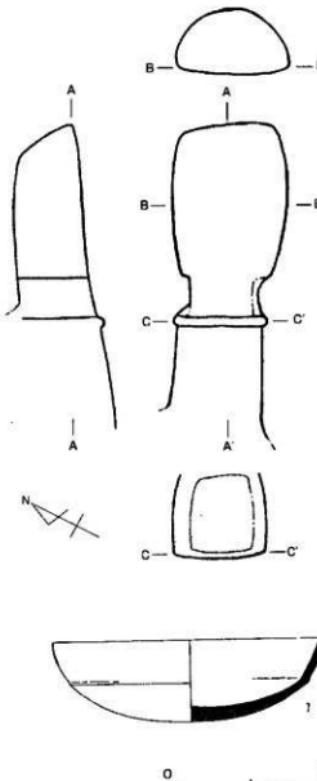
【前庭部】

前庭部は、奥行き2.00m、幅1.83mで、台形状の平面形をなす。羨道入口より2m手前の部分で岩盤の斜面となっており、前庭部の両壁のなくなる部分と一致するため、ここまでが前庭部と思われる。前庭部内に堆積土があったが今回の調査ではこの部分は精査していない。

【出土遺物】（第15図）

前回調査時に玄門から羨道部にかけての水成堆積層より土師器杯1点（1）と、外面格子状・内面弧状の押型のある須恵器破片が出土している。1は体部に陵線をもつ内面黒色処理された丸底の杯であり、底部に5.3cm×4.6cmの「X」状のヘラ書きがみられるものである。

今回の調査では、何も出土していない。



第15図 6号墓と出土遺物

【7号墓】(第16図)

A地区のうち標高61.969mの西側斜面で6号墓の北側の3.75m離れた位置に構築され、玄室・玄門・羨道・前庭部からなり中軸線方向はN-51°-Wである。3~9号墓中最も高い所に位置する。

[玄室]

奥行き1.45m、幅2.15mで平面形が隅丸の長方形を呈し、天井までの高さ1.00mで立面形が変形ドーム形となる。棺座などの施設はみられず、床面はほぼ平坦で、玄門の所で玄門床から8cmの段を1段もつ。玄室中央部付近から玄門部にかけて幅11cm、深さ8cm、長さ30cmの排水用とみられる溝がある。玄室の壁面・天井部では幅5~6cm程の整形痕跡がみられ、天井部では手前から奥に向かって、壁面部では奥から手前に向かって横位に展開している。

[玄門]

玄室のはば中央に位置し、奥行き0.35m、幅0.65m、高さ1.00mを測る。立面形は方形をなし、玄室の天井との接ぎが見られない。玄室と羨道部の境に閉塞用と思われる溝(幅18cm、深さ12cm)がある。

[羨道]

羨道部は、奥行き1.92m、幅1.20m残存する高さ1mで立面形は天井部隅が方形を呈する。天井部が半分ほどと壁面は崩落している。床面は平坦で玄門の床面と段差なく、開口部に向かって緩やかに傾斜する。左壁面の残存部の一部に1号墓などで見られた柱列状の整形痕跡が数条見られる。

右壁は崩落が著しく確認できなかった。前調査時に羨道閉塞用溝の所に河原石が検出されているが今回みられた河原石は羨道部に散在し原位置を留めていない。

[前庭部]

前庭部は、奥行き3.00m、幅2.03mで、羨道部の天井が崩落しているため、詳細は不明だが台形状の平面形を呈する。

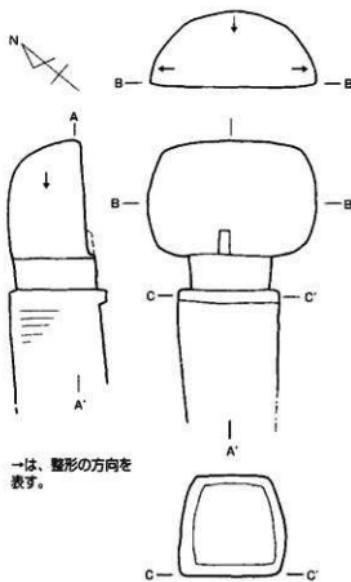
羨道入口より3.00m手前の部分で岩盤の斜面となつており、前庭部の両壁のなくなる部分と一致するため、ここまでが前庭部と思われる。

前庭部内に堆積土があったが今回の調査ではこの部分は精査していない。

[出土遺物]

前回調査時に、羨道床面左壁際付近より砥石と鉄錆片が出土している。砥石は長さ20cmの断面五角形を呈するもので研磨使用の痕跡が著しいものである。鉄錆は錆が著しく形態不明である。

今回の調査では何も出土していない。



→は、整形の方向を
表す。

第16図 7号墓

【8号墓】（第17図）

標高61.0mの西側斜面で7号墓の北側の3.10m離れた位置に構築され、玄室・玄門・羨道・前庭部からなり中軸線方向はN-48°-Wである。

【玄室】

奥行き1.80m、幅1.50mで平面形が長方形を呈し天井までの高さ1.15mで立面形が変形アーチ形となる。棺座などの施設はみられず、床面は玄室幅の部分で「U」字状をなし、玄室奥から手前に向かって緩やかに傾斜する。

【玄門】

玄室の中央より若干右に位置し、奥行き0.50m、幅0.85m、高さ0.95mを測る。立面形は方形をなし、玄室の天井・床との境がほとんどなく床面は緩やかに傾斜して続く。玄室と羨道部の境の床面で羨道部床面との約7cmの高低差をもつ段があり、そのまま羨道部側床及び壁面にある閉塞用と思われる溝（幅12cm、深さ6cm）となる。

【羨道】

羨道部は、奥行き2.31m、幅1.10m、高さ1.20mで立面形は方形を呈する。床面は平坦だが開口部に向かってゆるやかに傾斜する。

【前庭部】

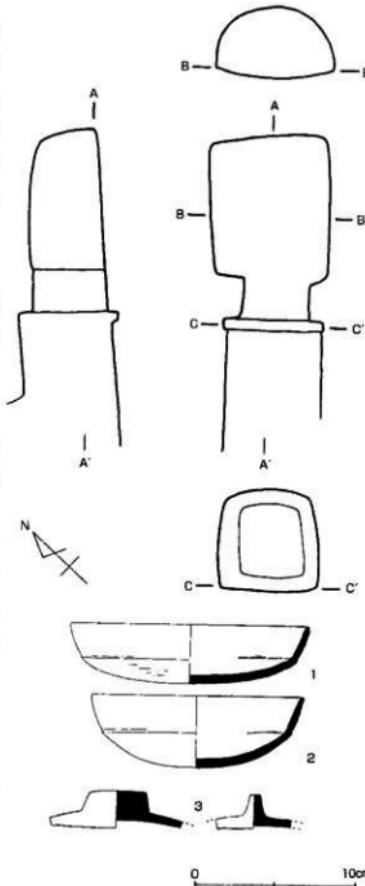
前庭部は、奥行き2.20m、幅1.78mで、台形状の平面形をなす。羨道部入口の左右脇に方形の柱穴（長軸26cm）が見られる。

羨道部より2.20m手前の部分で岩盤の斜面となっており、前庭部の両壁のなくなる部分と一致するため、ここまでが前庭部と思われる。前庭部内に堆積土があったが今回の調査ではこの部分は精査していない。

【出土遺物】（第17図）

前回調査時に羨道部床面上の水成堆積層中より腹部に後縫のある内黒処理された丸底の土師器杯（1、2）、丸底で口縁部内反する壺、つまみのある壺の蓋（3）破片が出土している。

今回の調査では何も出土していない。



第17図 8号墓と出土遺物

【9号墓】（第18図）

標高59.9mの西側斜面で8号墓の北側の3.50m離れた位置に構築され、玄室・玄門・羨道からなり中軸線方向はN-80°-Wである。A地区中一番低い所に位置する。

【玄室】

奥行き1.85m、幅2.05mで平面形が不整な長方形を呈し天井までの高さ1.15mで立面形が変形アーチ形となる。床面の左右に棺座を有し中央には幅20cm、深さ8cm程の狭い通路が見られる。棺座は玄室前壁より約15cm程中軸線側まで寄って幅広くつくれられており各棺座の通路に面する部分と玄門に面する部分には幅6cm、高さ4cmの縁帶がつく。奥壁には通路に向かうよう排水用とみられる溝があり、縁帶も玄室中央で途切れる。棺座はほぼ水平に造られる。通路床面は玄室奥から手前に向かって緩やかに傾斜する。

【玄門】

玄室の中央に位置し、奥行き0.65m、幅0.85m高さ1.25mを測る。天井・壁面がほとんど剥落しているため詳細は不明である。床面には、玄室の通路がそのまま伸びて羨道まで至り高さ3cmの段が玄室入口で2段みられる。

【羨道】

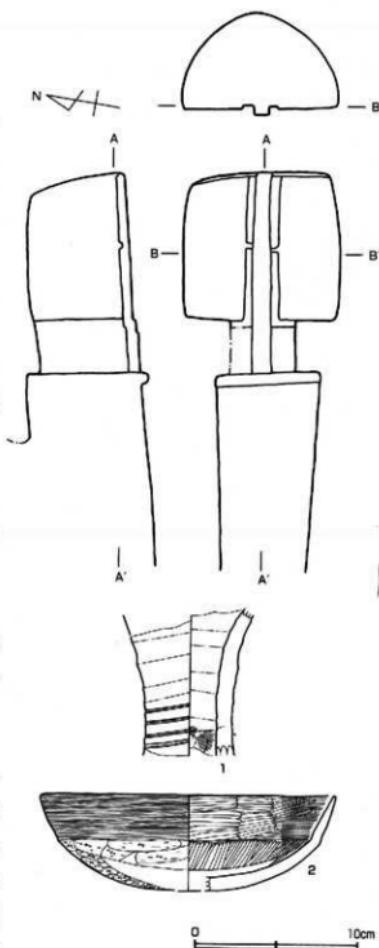
羨道部は、奥行き1.67m、幅1.24mだが玄門と同様に剥落が著しく原形を留めていない。床面は平坦で開口部に向かってゆるやかに傾斜する。

【前庭部】

崩落が著しく、そのまま緩やかな斜面として統べたため範囲などを特定できなかった。堆積土がみられたが今回は調査していない。

【出土遺物】（第18図）

前調査ではなにも出土していないが、今回の調査で前底部の表土及び前調査時の排土内より須恵器の長颈破片（1）、土師器坏片（2）が出土している。1は、器形は不明だが螺旋状に巡る沈線が施される。2は、丸底で体部に稜線をもち軽く内湾しながら外傾する口縁部をもつもので底部にヘラケズリ、内面に黒色処理がなされる。



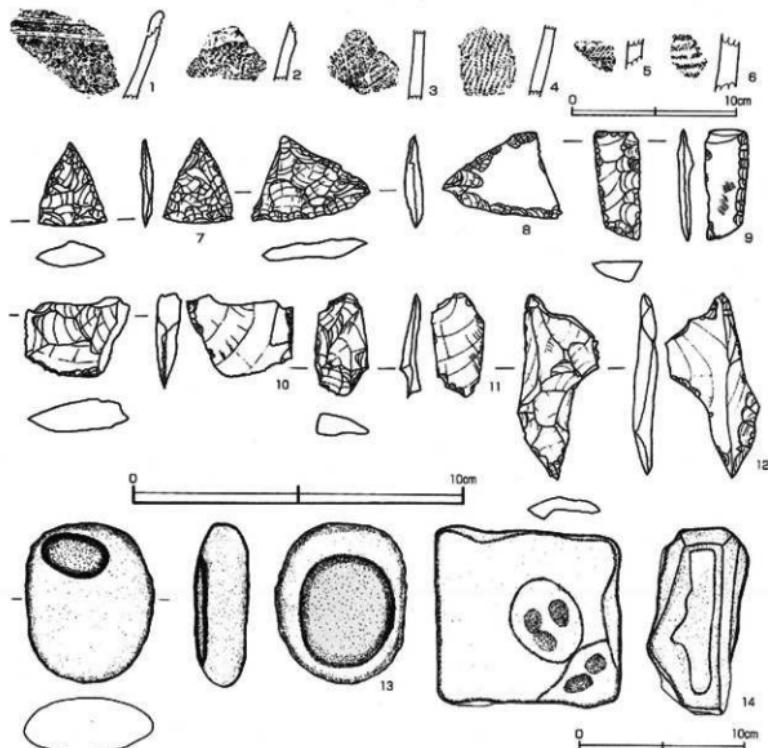
第18図 9号墓と出土遺物

【遺物包含層と出土遺物】（第19～20図）

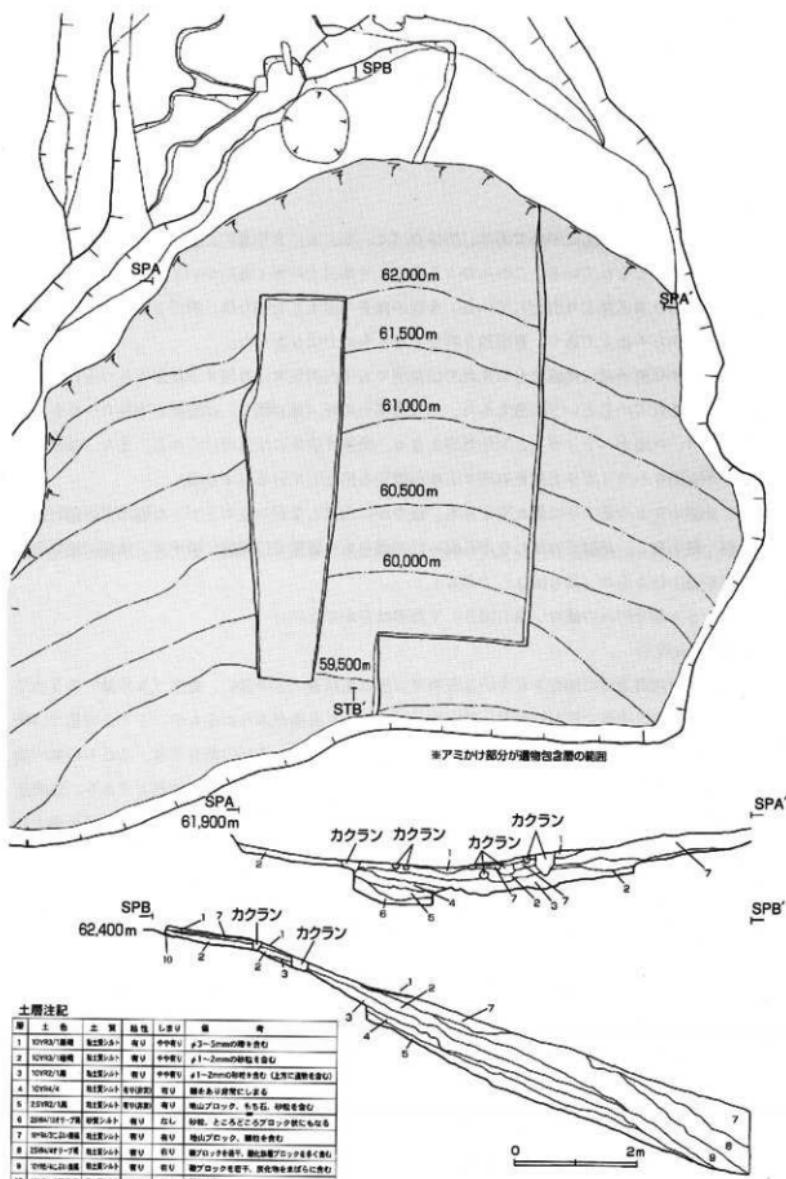
1号墓前部端を始まりとして下部斜面は、小さな谷状の地形となっており調査区外まで続く。この谷地内には、表土下は地山面まで大きく9層の堆積がみられ谷を覆っている。基本的にしまりのある砂質もしくは粘土質のシルトで構成され、土色は黒色と褐色の層が交互に堆積する。各層とも多少傾斜の緩くなった部分などを中心として礫や地元で「モチ石」と呼ばれる石英石がまばらにみられた。谷地の始まりと調査区南端の地山面の落差は幅8mで約3mとなっており約30°で傾斜している。

4層上面より土器片や石器などの遺物がまばらに分布して出土している。（第19図）

第19図1は鉢形土器と思われる口縁部片であり、口縁部外面に半截竹管状工具により2条の平行沈線が施文され沈線間はミガキにより無文となる。2～5は、体部片でL R縄文が施文される。5は筋の細かいものとなる。6は、R L 3 r ?で施文される。7～12は石器である。7は無基形の石鏃である。8は石匙の破片とみられ刃部に若干の光沢がみられる。10～12は不定型石器で細かい刃部を形成し、微細剥離しているものもある。13、14は砾石器で13はすり石、14は石皿の破片である。



第19図 遺物包含層出土遺物



第20図 遺物包含層

第Ⅳ章 考察

1. 遺物について

追戸横穴墓群A地区より出土した遺物には、土師器、須恵器、玉類、その他の遺物が出土している。

【土師器について】

出土した上師器のほとんどが杯であり、杯5点（4、6、8、9号墓）、壺形土器（1号墓）、蓋形土器（8号墓）となっている。これらのうち6、8号墓出土の杯と蓋については、前回調査時に出土したものであり後述より出土している。今回の調査で出土した残りは、総て1号墓の前底部堆積上や表上などからの出土であり、原位置を特定できるものではなかった。

杯は、4点が体部外面に棱線をもち丸底で口頸部で若干内湾気味に外傾する器形をもつもので、内面が黒色処理されているという特徴をもち、9号墓出土の杯（第18図2）は底部が手持ちハラケズリ、口頸部がナデ、内面がハラミガキと黒色処理となり、栗団式後半に位置付けられる。また、器形は定かでないが背面をハラミガキと黒色処理する杯小破片も出土している（4号墓）。

壺は、体部中央より若干下に最大径をもち、緩やかに内湾しながら立ち上がった体部が頸部付近で内側に軽く段を有し、頸部で外反しながら開口し頸部をもつ器形で口頸部に横ナデ、体部に縦位のハケメ調整が施されるもの（第8図2）である。

蓋は、つまみ部分のみの破片（第17図3）で器形は定かでない。

【須恵器について】

須恵器は、前回調査時に図化されている資料では壺と長頸壺（3号墓）、提瓶（5号墓）の3点であり、その他は破片資料で器内に円形・半円形・弧文のあて具痕がみられるもの、1・2号墓で口縁部外面に波状文をもつ大壺が出土していることが報告されている。今回の調査では、これらの破片資料の一部とみられるもの（1号墓の壺、2号墓の須恵器片、3号墓の壺破片）が殆どであり、前調査で報告されている場所とはほぼ同じ位置から出土している。新たに出土したものは9号墓の表土中より出土の長頸壺頸部の破片のみである。

出土した須恵器は、大壺、壺、長頸壺、長頸瓶であり杯の出土は見られない。

大壺は、器厚が厚く口縁部外面に櫛歯状工具により波状文平行沈線が交互に施文されるもの（第8図3）と、器厚がうすく口頸部が無文で体部外面に条痕、内面に同心円形タタキを施すもの（第8図1）の2種類見られる。前者は長根窓跡B-1窓跡出土須恵器などに類例がみられ、後者は中野B地区12号墓出土の大壺などにみられるような丸底の壺となると思われる。

壺形土器は、外面にハラケズリ及び同心円形叩き目のち横ナデ、内面にナデを施すもの（第12図）で底部はナデによる再調整が施される。この外面同心円叩き目を有する須恵器は、千葉県・栃木県・茨城県などの関東地方北部を中心に分布することが知られており、茨城県新治窓跡群が生産地と推定され、年代的には7世紀初頭～9世紀中葉頃のものとされている（1994：山口）。今回、胎土などの

比較し確認できなかったので詳細は不明であるが、関東北部との関連が伺える。

長頸壺は、肩部が強く張り肩部と胴部の堀が鋭い棱をなすもの（第12図4）で、追戸B地区3号墓や仙台市善應寺横穴8号墓などに類例が求められるとされている。（1973：佐々木）

提瓶は、口縁部や体部が欠損しており器形など不明である。（第14図1）

〔玉類について〕

すべて前調査時の1号墓前庭部から出土（第7図）であり、トンボ玉、切子玉、勾玉などがある。

トンボ玉（第7図1）はコバルト地に白線で囲まれた藍色を有するものではほぼ完全な球体を呈する。一度半分に割れたものを接合しており内部は、薄緑色のガラスの球体を中心に球の縁辺に放射状に着色され、穴は円形の工具によりつくられている。付近でのトンボ玉の出土例は中田町白地横穴墓群出土のものなどがあり、前調査時の報告では本遺跡出土のものは輸入品として位置付けられている。

切子玉は、水晶製で3点出土しており、片側から穿孔され貫通している。追戸B地区や涌谷町竜淵寺横穴墓群など（第21図）にも出土がみられる。

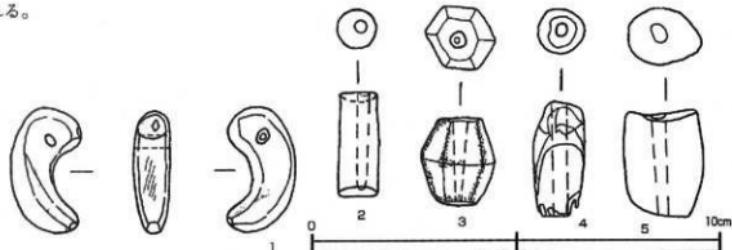
勾玉は、翡翠製・瑪瑙製・蛇紋岩製の3点が出土しており、丹念に磨かれ、片側から穿孔されたのち最後に反対側からも穿孔されて貫通している。翡翠製勾玉などは「C」字形に近くなることなどから、6世紀まで遡る可能性があるとされている。（1973：氏家）

〔その他〕

2、7号墓から砾石が出土している。その他に2号墓から切込壺と人骨やキセル、7号墓から鐵鎌が出土している。総て前回調査時の出土であり、今回は特に出土していない。

また、1号墓の前域で確認された遺物包含層出土遺物は、いずれも小破片であるため詳細は不明だが、第19図1に見られる細い半截竹管状沈線や5などに見られる細かい繩文の施文などから、弥生時代後期頃の遺物と推定される。

今回の調査遺物は、出土数が少なく内容としても前調査の出土遺物などに比して大きく変化するものではないと思われ、A地区出土遺物の年代は、概ね7世紀後半～8世紀を推定される。但し、1号墓よりトンボ玉を出土していることや3号墓より関東北部との関連が推定される遺物の出土などは、追戸横穴墓群内でのこの地区を特徴付けるものであり、被葬者等を考えていく上で貴重なものと思われる。



第21図 龍淵寺下横穴出土玉類

2. 遺構について

今回の調査区域で検出された遺構は、横穴墓9基があり、遺物の散布がみられた包含層がある。

遺物包含層は、堆積土の状況などから自然堆積でかなり急斜面上に位置する。出土する遺物も細片資料が多く、第19図1などは弥生時代後期頃のものと推定されるが、立地する地形などから集落などと隣接してあったとは考えにくく、何らかの理由によって廃棄等されたものと思われる。

[横穴墓について]

今回調査対象となったA地区を含め追戸・中野横穴墓群の構造などの特色や編年については、前回調査の報告書に詳細に分類・検討がなされており、様式順列などが推定されている。それにより以下のことが、追戸・中野横穴墓群の横穴墓に関する特色としてあげられている。

- ① 大規模な構造をもつものが築造される反面、小規模なものもあること。
- ② 植座幅と玄室前壁の幅が一致せず、玄室中央よりの縁が玄門壁まで伸びて玄門側壁にとりつく形態をとる独特の形態をもつこと。
- ③ 横穴墓の整形・装飾には、一般的にノミ状工具によると思われ、柱列状の整形痕が残存し、A地区2号墓ではこの整形に沿って赤彩がなされること。
- ④ 閉塞施設として、玄門と羨道の二重閉塞性をもつものが多く、玄門部の閉塞には木製蓋が用いられた可能性があること。

これらをもとに追戸A地区横穴墓群について「規模・構造」「内部施設」「整形・装飾」「閉塞」に分けて概観すると、以下のようなになる。

「規模・構造」 1・2号墓が追戸地区最大の規模を呈しするのに対し、3~9号墓は他の地区でも普遍的にみられる規模となる。崩落により確認ができない9号墓をのぞいて、玄室・玄門・羨道(・羨門)・前庭を備え共通した構造をもつ。1・2号墓はその規模と同様に広い前庭部をもち、特に2号墓においては階段状のテラスをもつなどの特徴がある。羨道については存在が確認できず不明である。また、横穴墓の立地は基本的にほぼ同一の高さに一列に築造される。このことは、追戸・中野横穴墓群の各地区も同様であり、鹿島台町大迫横穴墓群などにも共通してみられる。

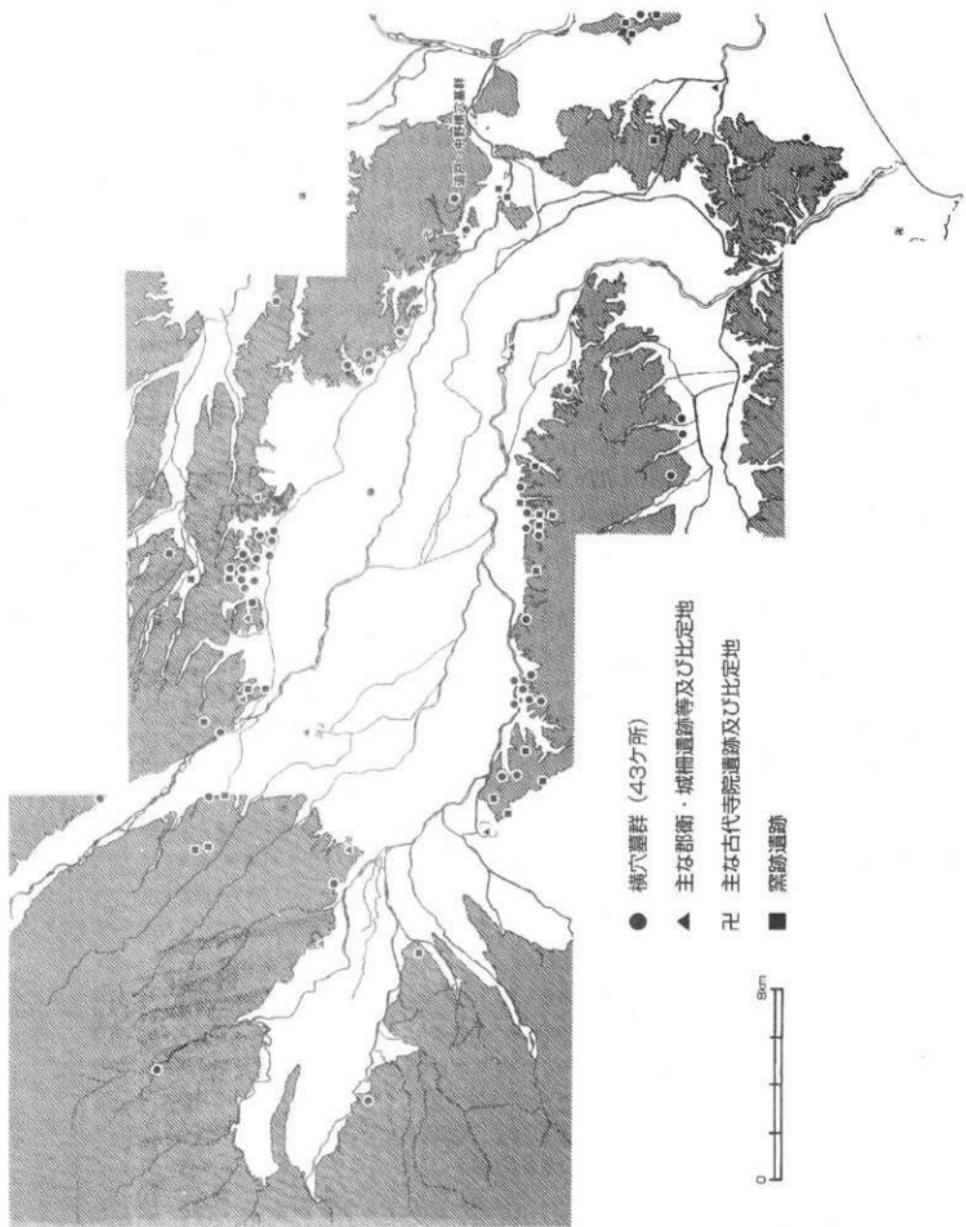
「内部施設」 2・9号墓のように特色②にあてはまるものがあり、追戸・中野地区の横穴墓群の主要な構造とされるものがみられるとともに1号墓のように植座幅と玄室前壁が一致するものや、3~8号墓のように無植座となるものもみられ、玄室平面形や立面形などは方形~不整な隅丸方形、切妻形・変形アーチ・変形ドームと様々であるが、大規模な1・2号墓が玄室が切妻形・方形となり、他は玄室形態が多様となる。ただし、玄室床面は羨道床面より段差もしくはある程度の傾斜をもって高く造られ、基本的に玄室奥から前庭部にかけて緩やかな傾斜をもっての築造となる。これらは、排水用とみられる溝の造られるものがあることなどから被葬者や横穴墓の特色とされる追葬や閉塞といったものへの配慮が基調となっていると伺える。特色②については、前報告書において同じ町内に立地する一箇横穴墓群でもみられるがそれ以外に確認された事例がないとされ、笠岳丘陵における横穴墓の特徴として捉えられている。

「整形・装飾」A地区の9号墓中、整形痕や装飾が確實に認められたものは1・2・5・7号墓であり、羨道部での柱列状の整形がみられる。1・2号墓では玄室内も同様な柱列状の整形がみられ、7号墓でも柱列状ではないが、玄室内天井部で手前→奥、正面で奥→手前と規則性のある整形が確認される。これらは、仙台市宗禅寺横穴群の調査報告で確認されている「整形工具痕」（工具痕のはば中央が浅く両端が高く方向や間隔が一定となるもので横穴築造の最終段階での施行が推測されている）と同様の痕跡と思われ、横穴墓間で工具幅などに若干違いはみられるもののこうした整形の方法は中野B地区1号墓などにもみられるとしている。また、2号墓羨道の整形は床面より約150cmの部分で上→下と下→上と方向が分かれるものがみられ、整形工具を使用した人の背丈などが連想される。

装飾は2号墓のみみられ、刷毛状の工具によりベンガラ（第VI章）が羨道部（格子状）玄室壁（縦位）がみられ、その他玄室床や棺座部分の一面に施される。格子状の装飾は、主に家の柱などをあらわしたものとされており、2号墓の場合も一定の間隔をおいた施文となっている。三本木町山畠横穴墓群や岩出山町川北横穴墓などが知られており、東北地方における装飾文様の特色の一つとされている（梅宮：1976）。床面などにみとめられた朱は特定の文様などをあらわすものではないため、むしろ朱塗壁などをもつ横穴式石室などにみられる施朱とされる風習に近いものとされる（一毛：1998）が、仙台市大年寺横穴11号墓においても同様な装飾が知られており、その特殊性に注目がなされている。2号墓の装飾においては、玄室のみにとどまらず羨道部までを装飾範囲としており、これは被葬者を葬る部屋に留まらずそれに通じる通路についても何か特殊な意味があったと伺える。

1・2・5号墓において線刻が確認される。1号墓は玄室天井に動物状、羨道壁に「大」字状、2号墓は羨道天井に「大」字状、5号墓は羨道壁に「十」字状に確認される。これらのうち、1号墓の「大」を除いては、幅2～5mm程度の断面「V」字状をなす細い線刻であり後世のイタズラなどとも理解される。しかし、この1号墓の「大」は幅約6cm程度で断面が「凹」状に深く刻まれており（写真参照）イタズラなどによるものとは理解しがたいものである。線刻は鹿島台町大迫横穴墓などでも発見されているが、船などを表しているもので、こうした例がどのような位置付けとなるか不明である。

〔閉塞〕A地区横穴墓群において閉塞の方法としては、柱穴や貫抜穴によるもの（1、2号墓の玄門・羨道入り・羨道壁、3号墓羨道入口、4号墓羨道壁、8号墓羨道入り）、石積みによるもの（2号墓羨道手前、3号墓玄門入口、4号墓玄門入口、5号墓、7号墓玄門入口）、溝等や段差を用いて木蓋などによると思われるもの（1号墓玄門入口、3～9号墓の玄門入口、但し溝が天井などまでまわるのは1・3・7号のみで木蓋の痕跡などが出土しないため詳細は不明）の3種類がみられる。こうした種類については岩出山町川北横穴墓群（平：1970）などでも確認されており、同時期での二重閉塞性を行う可能性もあるが羨道閉塞→玄門閉塞への時間差とともにみられるが、本横穴墓群がどちらのものであったかは不明である。ただ、3～9号墓でみられる玄門入口の溝が排水などの機能をもった閉塞用として理解されるなら、玄門と羨道の両方で閉塞したとみられる横穴墓は、1・2・3・9号墓である。どの横穴墓も羨道入口部分が崩落しており確認が困難だが、床面などに残っている柱穴によって閉塞されていたことが推測される。



第22図 大崎平野における横穴墓群分布

3. 追戸横穴墓群と被葬者の位置付け

追戸横穴墓群A地区は、各横穴墓ともにほぼ同一の標高に一列に構築され玄室・玄門・羨道部・前庭部をそなえる。そして、南斜面に構築され高く造り出された棺座・切妻形の玄室をそなえ長い羨道や大きな前庭部などをもつ1・2号墓、西斜面に構築され玄室が変形アーチ・ドームとなり他の地区でも見られるような規模の3～9号墓の2種類に大別できる。1号墓出土の玉類や2号墓の赤彩など施すことからも、この1・2号墓は追戸横穴墓群の中でも特別な存在として位置付けることができる。また、3～9号墓については1・2号墓に比して玄室形態や規模が異なるものの、中には羨道部に1・2号墓でみられるような柱列状整形がみられるなど1・2号墓の特徴的な要素をもつものもある。

隣接する中野横穴墓群でも中野B地区1号墓のみが大規模となるといった状況が知られている。大規模な横穴とその周囲の横穴といったような横穴墓の在り方は、仙台市大年寺横穴墓群などでは地区内の被葬者の関係を血縁的な結びつきとしてとらえ、大規模な横穴の被葬者を家夫長に準じる存在として位置付けており、追戸・中野横穴墓群でも血縁的な結びつきといったような具体的な関係の位置付けは出土遺物などが少數なため困難だが、同様な状況の被葬者が推測される。

横穴墓の基本的な構造や装飾文様などの在り方については、県内の横穴墓群と同様な状況を示すが、3号墓出土須恵器により関東地方北部との関係が伺え、ほぼ同時代に成立する色麻古墳群においても同様に関東地方との関係がすでに知られている（古川：1983）ことや、トンボ玉など玉類の出土、追戸B地区的出土須恵器は同じ町内に位置する8世紀初頭に成立する長根窯跡の製品と推定されており

（辻：1984、1990）「窯跡の工人との密接な関係」にあることが指摘されていること、本横穴墓群の付近に位置する国史跡黄金山産金遺跡が同時期の遺跡として関連性などが推測されていること（佐々木：1973）等は、この地域における被葬者の位置付け等を顕著にあらわす特徴として位置付けられるものであり、周辺地域と同様に地域と密接に関わりながらも律令制の浸透という大きな流れの中にあった状況が伺える。

当該期の大崎平野は、各地に「郡」が設置され律令制の浸透が進んだ時代であり、第23図のように丘陵と平野の境付近に「郡」の施設や窯跡などの生産遺跡が分布する。また、古川市の朽木横穴墓群と名生館遺跡といったように郡の施設や生産遺跡の付近に横穴墓が分布する傾向がみられる。あくまで分布から見た推測ではあるが、こうした遺跡と横穴墓の分布もしくは横穴墓の被葬者の位置付けは何かしら関連性があるものと推測される。仙台市大年寺横穴墓群や愛宕山横穴墓群などの「向山横穴群」では付近の郡山遺跡との関連が指摘されており、矢本町矢本横穴墓群と赤井遺跡（牡鹿郡・牡鹿郡家推定地）では出土遺物より関連性が指摘されている。こうしたことを考え合わせると、全数100基を超えると推定されている追戸横穴墓群においてもそうした関連性が推測されるが、残念ながら現時点では、この周辺が属していた「小田」郡の郡衙比定地の確認がなされていないため、推測の域を出ない。こうした郡の施設と追戸横穴墓のような墓域、長根窯跡のような生産遺跡や黄金山産金遺跡といったこの付近における当該時期の状況や関連性を考えいくと、本遺跡は古代東北における当地域の状況の一端を示す貴重な資料であり、今後、当地域における調査・検討に期待される。

第V章 科学分析

追戸横穴墓群における自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

追戸横穴墓群は、篠岳丘陵の南部縁辺に樹枝状に張り出した丘陵の一つに位置する。篠岳丘陵は、新第三紀鮮新世の凝灰岩質の岩盤で形成されている。追戸横穴墓群はA～C地区に分けられ、それぞれが10～20基ほどの横穴墓で構成される。このうち、A地区2号墓は、玄室、玄門、羨道部、羨門、前庭部で構成される。玄室内の奥棺座の縁帶部、左右棺座の縁帶部、左側棺座、床面の一部、左壁等で赤彩が施されている様子が確認されている。また、玄門や羨道でも赤彩が認められている。

本報告では、羨道の左右壁面から剥落したと考えられる赤彩の施された石材について、赤色顔料の種類を明らかにするために、X線回折分析を行う。また、横穴墓が構築されている岩盤の鉱物学的特徴を捉るために、岩石薄片作製鑑定を実施する。

1. 赤色顔料のX線回折分析

(1) 試料

試料は、2号墓の羨道の左右壁面から剥落したと考えられる石材に施された赤彩の部分から採取した赤色顔料1点である。

(2) 方法

分析は、足立(1980)および日本粘土学会(1987)を参考にした。土壤中に混在する赤色顔料をピンセットで抽出した後、105°Cで2時間乾燥した。これをメノウ乳鉢で微粉碎した後、アセトンを用いてスライドグラスに塗布し、X線回折分析試料とした。作成したX線回折試料について以下の条件で測定した。

同定解析は測定回折線の主要ピークと回折角度から原子面間隔および相対強度を計算し、それに該当する化合物または鉱物をX線粉末回折線総合解析プログラム(五十嵐、未公表)により検索した。

装 置：島津制作所製 XD-3 A	Time Constant : 2.0sec
Target : Cu (K α)	Scanning Speed : 2° /min
Filter : Ni	Chart Speed : 2cm/min
Voltage : 30KV	Divergency : 1°
Current : 30mA	Receiving Slit : 0.3mm
Count Full Scale : 5,000C/S	Scanning Range : 2～45°

(3) 結果

各赤色顔料のX線回折図を図1に示す。本赤色顔料は約20°(2i)付近からベースが高くなっていることから、酸化鉄を含むことが明らかである。ピークとして検出された鉱物は、石英(quartz)

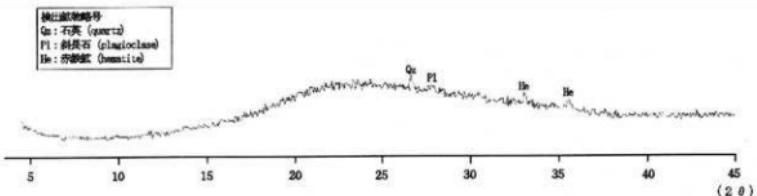


図1 赤色顔料のX線回折図

斜長石 (plagioclase)、赤鉄鉱 (hematite) の3種類である。

(4) 考察

赤色顔料のX線回折分析では、石英、斜長石、赤鉄鉱の3鉱物が検出され、回折線のベースが高いことから、赤色顔料中に鉄の存在量が高いことが示唆される。これらの鉱物中で、赤色を呈する鉱物としては赤鉄鉱が代表的である。したがって、石材に塗布された赤色顔料は、赤鉄鉱等の酸化第二鉄を原料とするベンガラと判断できる。

ベンガラは、日本各地で多くの出土例が知られている。ベンガラは、通常赤鉄鉱から精製されるが、赤鉄鉱の他にも様々な酸化鉄を含む鉱物から精製可能である（本田、1997）。また、遺跡から出土したベンガラの中には、しばしばパイプ状構造を持つものが確認されている（永嶋、1992, 1996）。実験の結果、パイプ状構造は、鉄バクテリアにより生成されたものであることが明らかとなっている（岡田、1997；降幡・沢田、1997）。鉄バクテリアの鉄生成物は、水たまり等で赤い沈殿物等として普通に見ることができる。これらのことから、ベンガラは身のまわりの様々な酸化鉄鉱物等を利用して生成することが可能であり、産地の限られる水銀朱等と比較して、入手が容易であったことが推定される。

古墳に施朱を行う習慣は、日本各地の古墳や横穴墓等で見られる。全国的に辰砂が現れるが、石室基盤、壁面、石材等にはベンガラが利用される一方で、被葬者の頭胸部には水銀朱が利用されるなど、辰砂とベンガラの利用は明確に区別されている（市毛、1998）。石室等にベンガラを使用する背景には、外気を遮断すると共に石室内の酸素を奪って酸欠状態にし、遺体を保存する意味があるとの指摘もある。今回の結果についても、ベンガラが羨道の壁面に塗布されている点で、これまでの結果と調和的といえる。市毛（1998）の指摘にしたがえば、玄室の奥棺座の縁帯部、左右棺座の縁帯部、左側棺座、床面の一部、左壁、玄門等に見られた赤彩もベンガラの可能性が高い。今後、棺の遺体が安置されていた付近に赤色顔料が見られれば、それについても分析を行い、赤色顔料の使い分けが実際にあるのか否かについても検討したい。

2. 石材の薄片作製・観察

(1) 試料

試料は、2号墓の羨道の左右壁面から剥落したと考えられる岩盤1点である。

(2) 方法

試料をダイヤモンドカッターにて切断し、切断面をスライドガラスにつけ研磨機で薄片プレパラートを作製する。偏光顕微鏡下にて岩石を構成している鉱物を鑑定し、試料の特徴をとらえ岩石を決定する。

(3) 結果

顕微鏡観察の結果、羨道部から剥落した岩石は軽石質火山礫凝灰岩に同定された。以下に鉱物的特徴を述べる。

岩石の組織：火碎岩状組織(pyroclastic texture)を示す軽石質火山礫凝灰岩。

鉱物片

石英：きわめて微量存在し、粒径最大0.25mmの破片粒状を呈し、不規則なクラックを伴う。

斜長石：少量～微量存在し、粒径0.15～0.6mmの他形で破片状粒状を呈する。集片双晶が発達する。一部の斜長石に累帯構造がみられる。

单斜輝石：微量存在し、粒径0.1～0.3mmの他形で、破片状粒状を呈する。淡緑色の色調を示す紫、斜消光する。

斜方輝石：微量存在し、粒径0.15～0.40mmの他形で、破片状粒状を呈する。淡緑色で弱い多色性を有する。

角閃石：きわめて微量存在し、粒径最大0.085mmの他形破片状粒状を呈する。緑色～淡緑色の多色性が著しい。

不透明鉱物：微量存在し、最大粒径0.2mmの他形粒状を呈して基質中に散在する。

岩片

軽石：多量～中量存在し、粒径0.15～9mmの塊状を呈する。纖維状組織・泡状組織・粒状組織を有する火山ガラスで構成される。一部に集斑状に斜長石を含む。

安山岩：少量存在し、粒径3.2mmの亜角礫状を呈する。ガラス基流晶質組織を示す輝石安山岩、ガラス質斑岩状組織を示す安山岩がある。

火山ガラス：少量存在し、粒径0.2～1.2mmの亜円礫状～亜角礫状を呈する。淡褐色で直線上に伸長した晶子が定方向に配列しているものと無色で無定方位に晶子を群生しているものがみられる。

凝灰岩：微量存在し、粒径1.8mmの亜円礫状～亜角礫状を呈する。一部はセリサイト化している。

変質安山岩：きわめて微量存在し、粒径0.95～0.7mmの亜角礫状を呈する。有色鉱物および石

基はスメクタイト化している。

頁岩：きわめて微量存在し、粒径最大1.75mmの扁平状を呈する。主にセリサイトで構成され、炭質物とみられる黒色物質が織状組織を示し、いわゆる粘板岩の岩相を呈する。

基質

粘土質物質：鉱物片・岩片の粒間を埋めて少量存在する。火山ガラス質の微粉が大部分で、非晶質である。

変質鉱物

褐鉄鉱：少量存在し、割れ目に沿って岩片および基質粘土を汚染している。おそらく地下水の浸透による汚染と考えられる。

(4) 特徴

火碎岩類は碎屑物の粒度により肉眼的に凝灰岩(4mm以下)、火山礫凝灰岩(4~32mm)、凝灰角礫岩(32mm以上)に区分される。今回の試料は顕微鏡下では軽石を主要岩片とする火碎岩で、安山岩片および火山ガラス岩片を少量伴い、基盤岩石と思われる貞岩片を取り込んでいる特徴を有している。碎屑片の粒径は鏡下では9mmに達する軽石も認められ火山礫凝灰岩の岩相を示す。この特徴から、横穴が構築されている岩石は、軽石質火山礫凝灰岩と鑑定される。なお、試料は、肉眼観察でも、灰白色で主に数mm~2cm程度の軽石片で構成されること、比重もきわめて小さいことから、軽石質火山礫凝灰岩の岩石名が与えられる。

引用文献

- 足立吟也 (1980) 粉末X線回折法、「機器分析のてびき3」、p. 64-76、化学同人。
- 本田光子 (1997) 出土ベンガラの多様性について、日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集、p. 78-79。
- 市毛 勲 (1998) 新版 朱の考古学、296p.、雄山閣。
- 永嶋正春 (1992) 小谷遺跡出土弥生時代中期(宮ノ台期)の赤色顔料について、「小谷遺跡」、p. 129-130、財團法人印旛都市文化財センター。
- 永嶋正春 (1996) 小型深鉢(縄文時代中期)内の赤色顔料について、「千葉県佐倉市 神門房下遺跡発掘調査報告書」、p. 82-83、財團法人印旛都市文化財センター。
- 日本粘土学会編 (1987) 粘土ハンドブック 第二版、1289p.、技報堂出版。
- 岡田文男 (1997) バイプ状ベンガラ粒子の復元、日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集、p. 38-39。
- 降幡順子・沢田正昭 (1997) 酸化鉄系赤色顔料の基礎的研究、日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集、p. 76-77。

顕微鏡写真説明

鉱物等略号

Qz : 石英

Pl : 斜長石

Opx : 斜方輝石

Op : 不透明鉱物

Sh : 貝岩

And : 安山岩

Tf : 凝灰岩

Pu : 輻石

Gm : 基質

P : 空隙

第VI章　まとめ

- 1 追戸横穴墓群A地区は、標高約60mの丘陵頂部付近の南・西斜面にはば一列に分布する。
- 2 A地区内の横穴は9基あり、1・2号墓は大規模、3～9号墓は他の地区でもみられる普遍的なものとなる。
- 3 1号墓より東側は、表土や地山が厚く堆積し横穴墓を構成する凝灰岩が地中深くなり、厚く地山で覆われるため造営がなされなかつたと推測される。
- 4 1号墓の玉類の出土、2号墓のベンガラによる装飾などにより、本遺跡の特徴・代表的な横穴墓の形成がみられ、これらは被葬者がこの地域において代表する存在であったことが推定される。
- 5 本横穴墓の造営や使用は7世紀後半から8世紀にかけてとみられるが、1号墓などは狭道内の堆積土の状況から早くから開口し、転用などがなされていたとみられる。
- 6 本横穴墓群の被葬者や造営した人は、時期的・地理的に「小田都」や周辺の生産遺跡などと関わりのある人々と推測される。
- 7 追戸横穴墓群A地区の周辺には中野横穴墓群など100基を超えるとされる横穴墓が集中して造営されており、これらを造営した人々が墓域として共有を図っていた場所と思われる。

引用・参考文献

- 伊丹早苗 1996 「黄金山産金遺跡・黄金山南遺跡」涌谷町埋蔵文化財調査報告書
- 市毛 熟 1998 「新版 朱の考古学」
- 伊東信雄他 1976 「宗禅寺横穴群発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第9集
- 氏家和典他 1973 「宮城県涌谷町追戸A地区横穴群」仙台湾周辺の考古学的研究
- 氏家和典 1984 「宮城の古墳」「宮城の研究Ⅰ」
- 忠美昌之 1989 「宮城の横穴墓」第15回市町村文化財担当者研修講座資料
- 大友 透他 1997 「名取熊野三山周辺遺跡群発掘調査報告書—熊野堂横穴墓群—」
名取市文化財調査報告書第35集
- 熊谷裕行 1994 「仙台市愛宕山横穴墓群」仙台市文化財調査報告書第187集
- 古代城柵官衙遺跡検討会 1999 「第25回古代城柵官衙遺跡検討会資料」
- 斎藤良治 1976 「砂山横穴古墳群調査報告書」宮城県文化財調査報告書第44集
- 酒井清治他 1995 「須恵器集成図録 第4巻 東日本編」
- 佐々木茂楨 1973 「追戸・中野横穴群」涌谷町文化財調査報告書
- 佐藤敏幸 1998 「赤井遺跡」矢本町文化調査報告書第9集
- 鈴木勝彦 1994 「名生館官衙遺跡Ⅳ」占川市文化財調査報告書第13集
- 志間泰治 1977 「大迫横穴群」鹿島町文化財報告書第1集
- 進藤秋輝他 1990 「大年寺山横穴群」宮城県文化財調査報告書第136集
- 平 重道・加藤孝・氏家和典 1970 「宮城県塙造郡岩出山町川北横穴群発掘調査報告書(第1次)」
『岩出山町史(下)』
- 高倉敏明他 1985 「大代横穴古墳群」多賀城市文化財調査報告書
- 辻 秀人 1984 「宮城の横穴と須恵器」「宮城の研究Ⅰ」
- 辻 秀人 1990 「東北古墳時代の両期について(その2)」「伊東信雄先生追悼考古学古代史論致」
- 丹羽 茂 1981 「青山横穴古墳群第2次調査報告」三本木町文化財調査報告書第2集
- 藤沢 敦他 1998 「古墳時代の研究Ⅰ-地域の古墳Ⅱ東日本-」
- 藤沢 敦他 1998 「第8回東日本埋蔵文化財研究会 古墳時代の豪族居館をめぐる諸問題」
シンポジウム資料
- 吉川一明 1983 「色麻古墳群」「宮城県営圃場整備等関連遺跡詳細分布調査報告書」
宮城県文化財調査報告書第100集
- 松木秀明 1984 「沖積平野の形成過程からみた過去1万年間の海岸線変化」「宮城の研究Ⅰ」
- 水戸市立博物館 1990 「特別展「装飾古墳」—地下を彩る名画の世界—」
- 山口耕一 1994 「北関東地域における茨城産須恵器について(上)」
- 財團法人栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター研究紀要第2号
- 矢本町 1973 矢本町史

第2表 追戸横穴墓群A地区横穴墓計測表

	軸方向	標高(m)	玄室(m)						玄門(m)						羨道(m)			
			平面図	奥行	幅	高さ	立面図	棺座	その他	奥行	幅	高さ	立面図	その他	奥行	幅	高さ	
1号墓	N-34°W	63.320	不整方形	3.84	3.64	2.24	切妻形	3	排水溝	1.10	1.30	1.70	方 形	ノミ痕	6.00	2.24	2.25	
2号墓	N-19°W	61.220	方 形	3.26	3.06	1.92	切妻形	3	赤 彩	0.60	1.40	1.95	方 形	台状・赤彩	6.0	1.68	1.25	
3号墓	N-65°W	61.168	不整方形	1.85	1.80	0.90	変形アーチ	なし		0.45	0.95	0.90	方 形			1.50	1.15	1.20
4号墓	N-66°W	60.700	不整長方形	1.25	1.55	0.85	変形ドーム	なし	排水溝	0.35	0.65	0.90	方 形			0.80	1.00	—
5号墓	N-64°W	61.200	不整方形	1.95	2.00	1.15	変形ドーム	なし	排水溝	0.40	0.90	0.95	方 形			1.90	1.22	1.20
6号墓	N-61°W	61.000	不整長方形	1.90	1.45	0.85	変形アーチ	なし		0.50	0.80	0.95	方 形			1.50	1.00	—
7号墓	N-51°W	61.969	圓丸長方形	1.45	2.15	1.00	変形ドーム	なし	排水溝	0.40	1.00	1.05	方 形			2.00	1.30	1.25
8号墓	N-48°W	61.000	不整方形	1.80	2.05	0.95	変形アーチ	なし		0.50	0.85	0.95	方 形			1.00	1.20	1.20
9号墓	N-80°W	59.900	不整長方形	1.85	2.05	1.30	変形アーチ	2	排水溝	0.65	0.85	1.25		台状施設	2.50	1.35	1.45	

※計測値のうち、3~9号墓について、昭和37年の発掘調査時のものに基づく。

※羨道部内の()内・外の計測値は、長さ→床面(天井)、幅→玄門側(入口側)を表す。

第3表 A地区横穴墓群出土遺物観察表

土 器

出土地点	器種	器形	外面調整		内面調整		法量(m)			圆番号	写真番号
							口径	底径	器高		
1号墓前庭1層上部	須恵器	甕	平行叩目(木目徐行)、ナデ		平行叩目、ナデ		(23.0)	—	△36.3	8-1	22-1
1号墓前庭1層上部	土師器	甕	縦位ハケメ		摩滅により不明		(15.0)	6.2	(△46)(△26)	8-2	22-2
1号墓羨道10層	須恵器	甕	櫛齒状工具による波状文、平行沈線		ロクロナデ		—	—	(△11.5)	8-3	22-3
2号墓前庭床面	須恵器	甕?	櫛齒状工具による波状文		不明		—	—	(△4.9)	10-1	22-4
2号墓前庭表土中		摺鉢	ロクロナデ		底部:回転糸切り		—	13.4	△4.3	10-2	22-5
3号墓玄関床面	須恵器	甕	同心円叩目				—	—	(△8.9)	12-1	22-6
3号墓玄関床面	須恵器	甕	ヘラケズリ、同心円叩目→ナデ		ナデ、底部:切り落し後ナデ、ケズリ		—	10.0	△9.9	12-2	22-7
3号墓表土中	須恵器	甕	ナデ(頭部)→同形叩目		ナデ		—	—	(△3.9)	12-3	22-8
9号墓表土中	須恵器	長颈甕	ロクロナデ→沈線(螺旋状)		ロクロナデ→指頭押圧、ナデ		—	—	(△9.2)	18-1	22-9
9号墓表土中	土師器	杯	ナデ、ケズリ		ミガキ(黒色処置)		(18.0)	—	△5.9	18-2	22-10
包含層4層上面	弥生土器	鉢?	LR→平行沈線(半裁竹管状)→沈線間ミガキ		平行沈線(半裁竹管状)、ミガキ		—	—	(△5.0)	19-1	22-11
包含層4層上面	弥生土器		LR		ナデ?		—	—	(△3.6)	19-2	22-12
包含層4層上面	弥生土器		LR		摩滅により不明		—	—	(△4.5)	19-3	22-13
包含層4層上面	弥生土器		LR		摩滅により不明		—	—	(△3.7)	19-4	22-14
包含層4層上面	弥生土器		LR		摩滅により不明		—	—	(△1.8)	19-5	22-15
包含層4層上面	弥生土器		LR3r?		ナデ		—	—	(△3.6)	19-6	22-16

石製品

出土地点	器種	法量(cm)			重量(g)	石材	備考	図番号	写真番号
		長さ	幅	厚さ					
包金4層上層	石鑓	2.6	2.1	0.3	2.4	頁岩	無基形、素材両面に二次加工	20-7	22-17
包金4層上面	石匙?	3.2	2.8	0.6	5.6	珪質頁岩	刃部に若干光沢あり、素材両面に二次加工	20-8	22-18
包金3層	不定形石器?	3.2	1.3	0.7	4.6	珪質頁岩	素材両面に二次加工	20-9	22-19
包金2層	不定形石器	2.4	3.0	0.9	8.3	頁岩	剥邊の一部に二次加工	20-10	22-20
包金2層	不定形石器	3.8	1.7	0.6	5.2	珪質頁岩	剥片の一部に微細剥離	20-11	22-21
包金4層上面	不定形石器	5.6	2.2	0.6	9.6	頁岩	剥邊の一部に二次加工	20-12	22-22
包金4層上面	礫石器・すり石	9.9	8.0	3.4	235.2	石英安山岩	一部に摩滅が見られる	20-13	22-23
包金4層上層	礫石器・石皿	11.5	11.3	5.2	1102.1	安山岩	一部にくぼみをもつ	20-14	22-24

玉類

出土地点	器種	法量(cm)			重量(g)	石材	備考	図番号	写真番号
		長さ	幅	厚さ					
1号墓前庭部	トンボ玉	1.7	1.9	1.9	6.5	ガラス	円形工具による穴、昭和37年調査出土	7-1	22-25
1号墓前庭部	勾玉	3.4	1.2	0.9	6.2	瑪瑙	片側から穿孔、昭和37年調査出土	7-2	22-26
1号墓前庭部	勾玉	4.5	1.7	1.4	29.0	翡翠	片側から穿孔、昭和37年調査出土	7-3	22-27
1号墓前庭部	切子玉	2.9	1.9	1.7	10.2	水晶	片側から穿孔した後もう一方より穿孔、昭和37年調査出土	7-4	22-28
1号墓前庭部	切子玉	2.9	1.9	1.6	11.3	水晶	片側から穿孔した後もう一方より穿孔、昭和37年調査出土	7-5	22-29
1号墓前庭部	切子玉	3.3	2.0	1.7	15.8	水晶	片側から穿孔した後もう一方より穿孔、昭和37年調査出土	7-6	22-30

*上記の資料については、東北歴史博物館保管資料であり、今回承諾を得て新たに実測図等を作成したものである。

龍淵寺下横穴墓群出土玉類

出土地点	器種	法量(cm)			重量(g)	石材	備考	図番号	写真番号
		長さ	幅	厚さ					
1号墓玄室床面直上	勾玉	3.1	1.3	0.9	6.6	翡翠	片側から穿孔	21-1	23-1
1号墓玄室床面直上	管玉	2.5	1.0	1.0	4.3	翡翠	片側から穿孔	21-2	23-2
1号墓玄室床面直上	切子玉	2.2	1.9	1.6	8.3	水晶	片側から穿孔した後もう一方より穿孔	21-3	23-3
1号墓玄室床面直上	管玉	2.8	1.3	1.3	2.1	琥珀	片側から穿孔、剥離が著しい	21-4	23-4
1号墓玄室床面直上	コハク玉	2.7	1.9	1.9	4.4	琥珀	片側から穿孔、剥離が著しい	21-5	23-5

*龍淵寺下横穴墓群出土玉類は、平成8年の緊急調査時に出土した資料である。この他に遺物の出土がないため

年代等について不明であるが、追戸横穴墓群の年代と大きく聞くものではないと推測される。

*上記の資料については、今回新たに実測図を作成したものである。

写真1 1号墓羨道部セクション状況



写真2 遺者包含層セクション状況

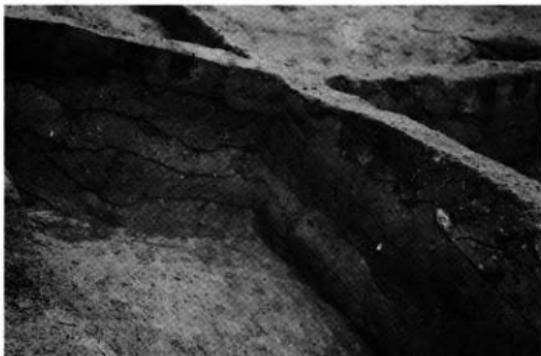


写真3 1号墓状況





写真4 1号墓前庭部状況



写真5 1号墓羨道部壁状況①
(「大」字状線刻)



写真6 1号墓羨道部壁状況②

写真7 1号墓玄門状況
(玄室から羨道部)



写真8 1号墓玄室壁状況
(右壁)



写真9 1号墓玄室状況

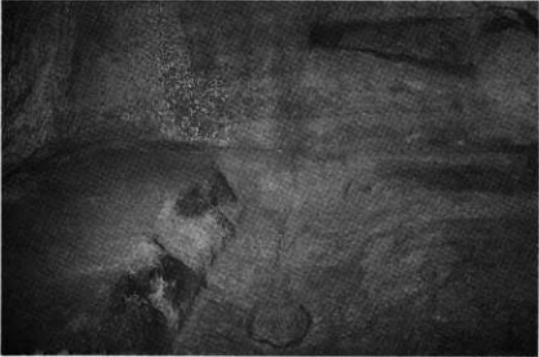




写真10 2号墓状況



写真11 2号墓前部状況



写真12 2号墓通道部壁状況

写真13 2号墓玄関状況
(玄室から羨道部)



写真14 2号墓玄関壁状況
(右壁)



写真15 2号墓玄室状況





写真16 3~9号墓状況
(手前が3号墓)



写真17 3号墓状況



写真18 4号墓状況

写真19 7号墓玄門状況



写真20 8号墓玄門状況



写真21 9号墓玄室状況



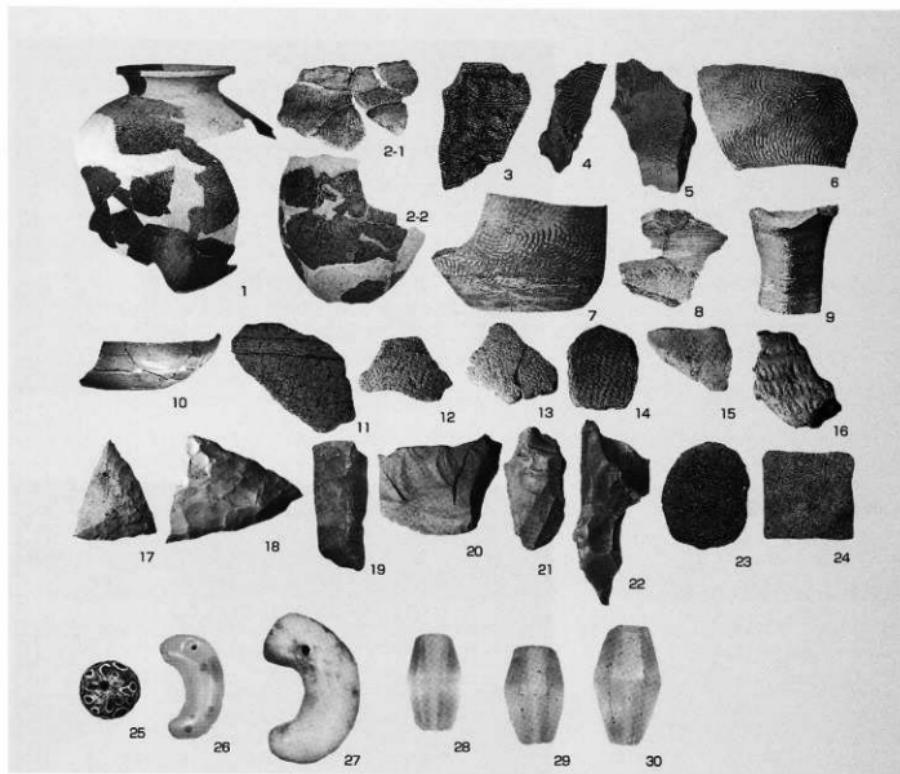


写真22 A地区出土遺物



写真23 龍淵寺下横穴墓出土玉類



写真22-1の拡大(外面)

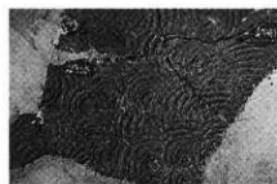


写真22-1の拡大(内面)



写真22-6の拡大(外面)

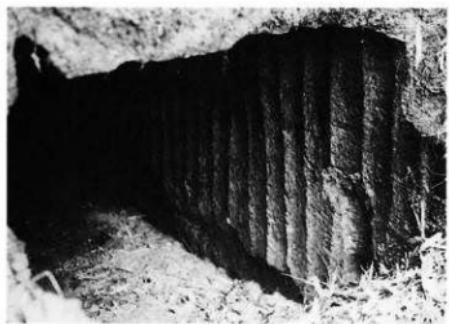
写真22 A地区出土出土遺物 写真23 滝淵寺下横穴墓出土玉類



1. 調査区遠景



2. 発掘調査直前状況
(2号墓)



3. 発掘調査直前状況
(2号墓)



4. 2号墓閉塞石出土状況

写真24 昭和37年調査時状況①



5. 2号墓完掘状況
(開口部)



7. 2号墓羨道壁面状況



6. 2号墓羨道天井の線刻状況



8. 出土遺物



9. 1号墓トンボ玉出土状況
(白丸内)



10. 1号墓出土のトンボ玉



11. 1号墓出土須恵器状況
(前庭部)



12. 出土した切込焼壺



13. 1号墓調査風景



14. 1号墓羨道部状況



15. 1号墓状況



16. 1号墓棺座状況

写真27 昭和37年調査時状況④



17. 出土した土師器



19. 遺物出土状況



18. 9号墓状況



21. 記念撮影（左から）

前列…加藤孝氏・氏家和典氏・

高橋富雄氏・佐々木宏氏・佐々木敏雄氏

後列…安部政敏氏・安部瑞雄氏・佐々木茂楨氏

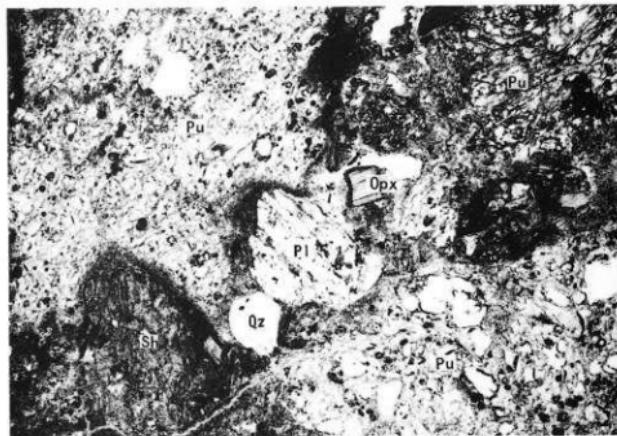


20. 記念撮影（左から）

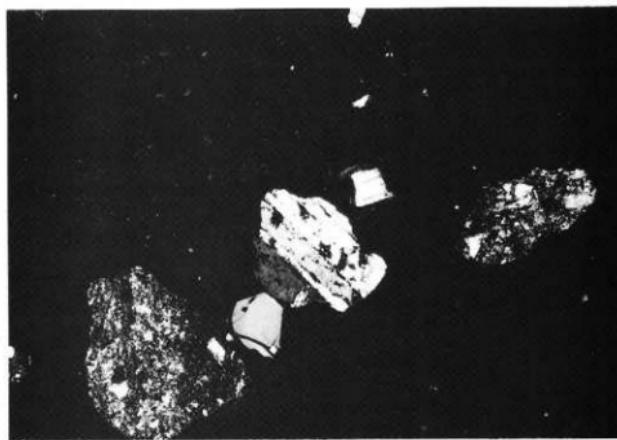
前列…古沢勝郎氏・佐々木敏雄氏

後列…伊東信雄氏・氏家和典氏

岩石薄片の顕微鏡写真



平行ニコル



直交ニコル

0 0.2mm

報告書妙録

ふりがな	おいどよこあなばぐんえーちく						
書名	追戸横穴墓群A地区						
副書名	整備事業に伴う調査報告書						
卷次							
シリーズ名	涌谷町埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第4集						
編著者名	福山 宗志						
編集機関	涌谷町教育委員会						
所在地	〒987-0113 宮城県遠田郡涌谷町字新町裏153-2 TEL 0229-43-3001						
発行年月日	西暦 1999年3月						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
	市町村	遺跡番号	°'\"	°'\"			
おいどよこあな 追戸横穴 墓群	みやぎけん 宮城県 とおだぐん 遠田郡 わかつちょう 涌谷町小塚 あざいどくわ 字追戸沢	0420	37011	38°32'08" 141°09'18"	19980907 ～ 19981130	約900m ²	整備事業 に伴う事 前調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な造構	主な遺物	特記事項		
追戸横穴 墓群	横穴古墳	古墳時代後期 奈良時代	横穴古墳 9基	土師器、須恵器 トンボ玉 切子玉、人骨	整備事業に伴う再 調査で、墓前域の 調査などを行った		

涌谷町埋蔵文化財調査報告書第4集

追戸横穴墓群A地区

[整備事業に伴う調査報告書]

平成11年3月31日印刷

平成11年3月31日発行

発行 宮城県涌谷町教育委員会
宮城県遠田郡涌谷町字新町裏153-2
TEL0229-43-3001

印刷 株式会社 石崎印刷
宮城県遠田郡涌谷町字六軒町裏84-7
TEL0229-43-2463

